

緋弾world in my life

nibi iro

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気がついたら何故か死んで違う世界に転生していた。

その世界は、武偵という武力行使を行う存在が当たり前にある『緋弾のアリア』という作品の世界だった。

せっかく手にした第2の人生だ。

可愛い女の子を侍らして、死なないように生きていこう。

願うは、前の人生よりは面白く。

※注意※

作者はアニメと漫画知識しかないので、細かい部分ガバガバになるかと思えます。

ですが、Wikiや色々なサイトで調べて疎かにならないようにします。

原作にかける愛は本物なのでご容赦くださいませ。

目次

プロローグ	1
第1章 2度目の人生	
第1話 武偵	5
第2話 試験とその裏側	11
第3話 佐々木 志乃との関係 ☆	16
第4話 武偵殺し	23
第5話 独唱曲の依頼	27
第6話 律紀と戦姉妹	31
第7話 中空知 美咲との秘密 ☆	35
第8話 武偵誘拐事件	41
第9話 逆鱗	46
第10話 毒を殺す毒	51
第11話 偶然ダブルデート	56
第12話 交じり合って、一歩進んで ☆	61
第2章 平和、時々、面倒事	
第13話 コンビで任務	67
第14話 水も滴る中空知 ☆	72
第15話 カルテット	77
第16話 特訓と先輩指導	84
第17話 束の間の	93
第18話 満たす愛と溺れる愛 ☆	101

プロローグ

「あっ♡あっ♡」

甘い香りがふわりと鼻につく。

「やあ♡んっ♡」

いやらしく身じろぐ度、彼女の豊満な胸が弾む。

「は、あっ♡っ♡やあ……っ♡」

「っ！白雪……っ！」

「はあっ♡キンちゃんっ♡キンちゃんすきい♡」

おかしい。

なぜこんなことになった。

なぜ俺はこんなことをしている。

疑問に思うも、身体がいうことをきかない。

雄としての反応が、衝動が、俺の身体を突き動かす。

ヒステリアモードはどこにいった？

「あっ♡」

「く、う……っ！」

思考が塗り潰される。

それもそのはず、今抱いている少女はあのスタイルが抜群な星伽白雪である。

成績優秀、品行方正。正に大和撫子といっても過言ではない美少女が、俺の手で雌になっている。

真つ当な思考ができるわけがない。

「ああっ♡もっとお♡もっとおっ♡」

正常位で繋がりが、欲求をぶつけ合う。

「お、おちんちんっ♡おちんちんでっ♡たくさ、んっ♡ズポズポっ♡」

「し、白雪……っ！」

脚が腰に絡まる。

腰が引かず、逃げ道が無くなった。

「脚を、外してくれっ！もう限界が……っ！」

「やだあっ♡」

流されるまま盛ってしまったせいで、避妊具をつけることを忘れていた。

このままだと膣内に出してしまう……！

「既成事実う♡つくるう♡赤ちゃんつくるのお♡」

足先から何かが昇ってくる。

「だしてっ♡いっぱい♡キンちゃん、のっ♡せえしい♡」

「あっ！」

びゅるる！どぶ！ぶゆびゅううう……！

「はあああっ♡♡♡んっ♡♡♡んっ♡♡♡」

やってしまった。

「はうっ♡お、おなかの、ひぐっ♡お、くう♡」

肛門周囲の筋肉が震え、逸物から子宮へと精子が注がれる。

「あついい♡あつく、てっ♡きも、ちっ♡いいっ♡」

イッているのか、白雪もピクピクと痙攣し膣内を蠢かす。

涙で濡れた瞳と口元から垂れるヨダレがよがり狂っている様だ。

「はあ♡はあ♡はあ♡」

荒く息づけば、大きな胸がふるりと揺れる。

その光景は、燃え続けている情欲の炎への燃料にしかない。

「キン、ちゃん……♡」

「っ！」

「もう、いつかい……♡」

この日、俺の中で何かが変わってしまった。



「……上手くいった」

飛ばしたドローンから送られてくる映像を見て、安堵のため息を吐

く。

(1番の難所は終わった。あとは今後どうしてくか……)

『あっ♡はげしっ♡あゝあゝ♡』

『白雪っ！白雪っ！』

インカムから聞こえてくる嬌声や水音。

星伽先輩と遠山先輩はすっかり夢中のようだ。

(……ちよつとやりすぎたかな?)

『射精すぞ！射精すからな！ぐうっ！』

『~~~~♡♡♡』

(……まあ、いいか)

むしろ、やりすぎなくらいが良いのかもしれない。

何せ相手はあの遠山キンジ。

この世界の主人公で、人外並みの戦闘力を保有する人だ。

油断してはならない。

(さて、第一段階が終わったことを連絡しないと)

「ん、んん……」

「あ」

モソモソと隣で寝息を立てていた少女が起きる。

すぐさまドローンを引き上げらせて、眺めていた携帯とインカムをしまおう。

録画と録音は済ませているし、問題はない。

「まだ、寝てていいのに」

「で、でも、せつかくふたりきりなのに寝ちやうのは……」

「……やりたいの？」

「~~~~♡っ！」

直球に聞きすぎたのか、顔を真っ赤にしながら俺の胸板に顔を預け、抱きついてきた。

「恥ずかしがるのは今更な気がするけど、そんなところも可愛いなあ」

「や、やめてください……」

「可愛いよ、志乃」

「あっ♡」

少女、佐々木志乃は艶やかな吐息を漏らす。

身体に潰れた巨乳がムニムニと当たり心地良い。

「今日は泊まっていく?」

「男子寮に女性が泊まるのは……んっ♡」

「大丈夫大丈夫。バレなきやいいんだよこういうのは」

「っ♡んんっ♡」

夜はまだ明けず、どこまでも続く空が黒く澄み渡る。



これは、本来存在する筈のない人間が織りなす物語。

緋弾の世界で第2の人生を歩む彼、藤^{ふじ}律^{りつき}紀のお話である。

第1章 2度目の人生

第1話 武偵

まさか自分が死んで二次元作品に転生するとは夢にも思わなかった。

「ふあ〜……」

防弾制服に身を包み、あくびを1つ。

長年の愛銃、ハイキャパを腰のホルスターに収め、反対側には頑強なサバイバルナイフを下げている。

この世界は、『緋弾のアリア』という作品の世界。

凶悪犯罪に対抗するため、武力を行使する探偵『武偵』の存在が当たり前前の社会である。

「今日のカリキュラム何だっけ…」

レインボーブリッジ南方に浮かぶ南北およそ2キロメートル・東西500メートルの人工浮島に設立された、武偵を育成する総合教育機関。

それが、俺が通う東京武偵高校。

一般教育の他に武偵の活動に関わる専門科目を履修でき、学園や民間からの依頼を受けてそれをこなすことも授業の一環とされている

ちなみに、報酬は任務を遂行した本人に支給されるため、お金に困ることは今のところない。

「あつーリツ君おはよー!」

「んあ?」

明るく、元気な声で虚空を漂う意識がハッキリする。

前へと視線を定めると、春から一緒のクラスメイトの姿があった。

「おはよう。間宮は朝から元気だなあ」

「えへへー」

ショートカットに短いツインテール、白いリボンが特徴の間宮あかり。

チンチクリンの^{アサルト}強襲科科1年。

「あかりが元気じゃないとむしろ困るだろ」

「……確かに」

金髪にポニーテールで男勝りなあかりと同じ強襲科アサルトの1年、火野ライカ。

「何か話してたみたいだけど、何を話してたんだ？」

「今日はいい天気ですって言ってただけですよ」

「のんきだなー」

武装検事の娘で絵に書いたようなお嬢様。探偵科インケスタの1年、佐々木志乃。

女子3人に男が1人混ざる形になっているが、互いに気にせず過ごしている。

……1人、例外がいるが。

「そんなんじや憧れの神崎先輩みたいになれないぞー？」

「そ、そんなことないもん！」

「なら、ランクが上がるように頑張らないとな。今日の中距離射撃訓練気合入れるよ？」

●
戦徒アミカ。

先輩と後輩がコンビを組み、1年間指導する二人一組（ツーマンセル）特訓制度のこと。

男子の場合戦兄弟アミコ、女子の場合戦姉妹アミカと呼ばれ、男子と女子が組む異性関契約も可能である。

ちなみに俺は異性間契約をしてる戦姉妹がいたりする。

「神崎先輩に戦姉妹申請ねえ……」

時は早々と過ぎて放課後、間宮が火野と佐々木を連れて俺の席へやってきた。

「まあ、普通に考えれば無理だろうな」

「うう……」

神崎・H・アリア。

名前からわかる通りこの世界の主軸となる1人で、14歳からロン

ドン武偵局の武偵としてヨーロッパ各地で活躍し、狙った相手を99回連続、かつ武偵法の範囲内で全員捕まえ、その間1度も犯罪者を逃がしたことがない。

そのため武偵の間では有名人で、間宮のように憧れる人も多い。

「強襲科でランクS。『双剣カト双銃ドラのエリア』なんて二つ名もあるくらいだしな。申請するならそれなりの覚悟がないと」

「そんなのわかってるよー!」

「契約試験は先輩との一騎打ちだぞ? 何か策でもあるのか?」

「それは……」

押し黙る間宮。

やはり、これといった作戦とかはないらしい。

「無いからこそ、律紀に聞いてみようってなったんだぜ」

「戦闘において私達より強いですし、インフォルマ情報科の律紀さんなら先輩の情報とか掴んでいるんじゃないかなと……」

「そうは言われてもなあ……」

確かに、神崎先輩に関する情報はある。

インフォルマ情報科でランクAの肩書き以前に、前世での知識とあの人からの依頼をこなす為に教えてもらった情報があるが……。

(ぶつちやけ教えちやいけないことの方が多すぎて困る)

そして、教えてもいいことがどうでも良すぎる情報で役に立たなそうだ。

……まあ、無難な事を教えてお茶を濁そう。

結果は知ってるし。

「あく……、試験は『エンブレム』だろうから今のうちにストレッチしとくとか?」

「テ、テキストすぎないか!」

「もう少しこう、何かないんですか! 仮にもSランクを取れると言われてる腕があるんでしよう!」

「いや、取る気ないし」

Sランクになったらやる事が増えるだろうからな。

これ以上頭を悩ませるのは御免だ。

「……エンブレムのルールって何だっけ？」

まさかの間宮の一言で、俺と佐々木と火野は思いつきりズツコケた。

「おい、強襲科。自分の専門科目に関わることぐらい把握しなさい」

「エンブレムは強襲科が推奨している戦姉妹試験勝負で、制限時間30分以内に先輩から星型のエンブレムを奪うという試験なんです」

「ようは名前のまんま、あかりがどうにかしてアリア先輩からエンブレムを奪うのが試験だ」

「わ、私がアリア先輩から奪う……！」

「細かい条件は人によって変わるかもしれないけど、神崎先輩は自分から武器の許可を出してくる。それでも、今まで全員取れずに不採用だな」



チャイムが鳴り響く。

ぽかぽかとした春の陽気が満ちる空の下を4人で辿る。

そんな中、間宮は1枚の紙を落ち込んだ表情で眺めていた。

「中距離射撃訓練は上手いかなかったか」

「……うん」

紙には中距離射撃訓練結果が書かれており、144名中最下位という結果が記されていた。

「強襲科、辞めた方がいいんじゃないですか？」

「辞めない。アリア先輩と同じ強襲科で戦姉妹契約したいんだもん」

「なんならアタシが近接格闘教えてやろうか？」

「ライカはバカでエツチだからやだ！」

「だとき、バカライカ」

しかも、間宮にCCC教えても扱えないだろうしな。色んな事情で。

「バ、バカはそっちだぜ！ アリア先輩は強襲科トップでお前はビリなんだぞ！ 組むどころか口聞けるチャンスすらねえーんだよっ」

「そうですよ、あかりさん。悲しいかもしれませんが、人には適性や身の程というものがあるのですよ?」

「……うう」

ギョツと用紙を握り、目尻に涙を浮かべる間宮。

佐々木と火野の言うことはもつともだが……。

「諦めるか?」

「え……」

俯き始めた顔が上を向く。

「ここで諦めるのは武偵としても、神崎先輩を目指す後輩としてもどうかと思うけどな」

「っ!」

「できないことが多くても、できることはあるはずだろ? 間宮にしかできないことが、さ」

「あたしにしかできないこと……」

「いいこと言うじゃない!」

『っ!』

声が聞こえた。

「その男子の言う通りよ。始まる前から諦めるのは武偵としてもそうだし、人としても良くないわ!」

桜の花びらが舞う中で、反響する声を辿る。

そこにいたのは、ピンクのツインテールと赤紫色の瞳を持つ美少女カメリア

「あたしは機会チャンスは誰にでも平等に与えられるべきだと思ってる。武偵は常在戦場。もし、あたしが敵だったら……」

「頭に風穴あいてたわよ!」

——神崎・H・アリア

「間宮あかり! あたしの戦姉妹になりたいなら、あたしと勝負よ!」
……さて、と。

(5) (6) (7) (8) (9) (10)

第2話 試験とその裏側

「チャンス機会は誰にでも平等に与えられるべきだわ。でも、結果は平等じゃない。努力次第よ」

桜の木から降り立つ神崎先輩。

ピンク色同士で絵になるな。

「あたしは忙しいの。マスターズ教務科の命令でも無条件でお守りなんかしないわ。だから——」

懐を探り、取り出したソレは……。

「——エンブレム。今からやるわよ」

予想通り、校章が彫られた星型のエンブレム。それを腹の辺りに張り付けた。

「せ、制限時間は30分で武器はありますか？」

「あら、よくわかってるじゃない」

携帯のタイマー画面をこちらに見せる。

「チャンスチャンスは人を待たない。事件が武偵を待つてくれないのと同じようにね。そして、時間も待つてはくれないわ」

タイマーは刻々と時間を減らす。

示される残り時間は既に1分を切りそうだ。

「あかり！」

「あかりさん！」

「い、いきます！」

事前にエンブレムのルールを教えたからか、重心を低めにして容易にあしらわれないように間宮が飛び掛かる。

「甘いわ」

直線的すぎて、ヒラリと躲された。

「ま、だ！」

すぐさま足でブレーキを踏み、先程よりも素早い挙動で接近するが……。

「フッ！」

『っ！』

(綺麗な跳攀法パルクールだなあ)

無駄のない身のこなし。

後ろにあった桜木へ飛んで足をつき、身体を捻って躲す。

跳躍の際は、間宮を飛び越える時に後頭部に手を置いた。

「うわあーととつ……」

寸前で何とか踏みとどまり、木に激突するのは免れた。

「間宮！武器！」

「うん！」

声を投げかけると携帯しているタクティカルナイフを逆手に持ち、切りかかる。

「ぎゃっ！」

対して先輩は間髪入れずに、刀を使って奪い去る。

「武器は何をされても離しちゃダメ」

短機関銃マイクロUZIを構えようとするも阻止され、虚空へと無駄撃ちに。

「ああっ……！」

「無駄弾は使わない事」

「……ッ」

バスつと一発、脚に弾丸を食らい膝をつく。

拳銃アルカタ格技でいいようにあしらわれてしまった。

流星はSランク武偵。

その強さがよくわかる。

「あかり！」

「あかりさん！」

「大丈夫……。防弾制服だから……」

火野と佐々木が駆け寄り、心配そうに様子を伺う。

すり傷とかはできているが、元気そうだ。

「ねえ、その男子」

「……えっ、何ですか？」

突然、神崎先輩が声を掛けてきた。

「あんだ、もしかして情報科の藤 律紀？」

「……そうですけど」

「ふうーん、あんたがねえ……」

じい〜つと品定めするかのように見られる。

何なんだ一体。

そんなに見られても困るだけなんだが。

「ま、今はいいわ。それよりも……」

視線を外し、今度は間宮へと向く。

「おいで、鬼ごっこしよ」

「……あかりさん、規則上助太刀^{ヘルプ}は出来ませんが……武運を！」

「頑張れあかり!!」

「無理かもしれないけど、行ってくるよ！」

「いつてら〜」

「うへっ!!」

走りだそうとしたら早速こけた。

「おいおい、大丈夫かよ」

「リツ君が気の抜けること言うからあ！」

「俺のせいだよ」

「志乃ちゃんとライカみたいに応援して！」

ええ……。何だそりゃ。

とはいえ、ここでせずつに行かせるのは後味が悪いか。

「まあ、なんだ。間宮のしたいようにやれ。そうすればきつといい結果になるさ」

「——うん！」

改めて、先輩を追って走っていった。



「……いつちやったなあ」

「あかりちゃん、大丈夫でしょうか……」

「こればかりはなるようにしかならんからな。ダメだったら励ますしかない」

そんな結果にはならないと思うが。

「んじや、アタシはバイト行くから！　また明日な！」

「はい」

「おう」

そう言つて、ライカはすぐさま走り去つていった。

そして、取り残される俺と佐々木。

「……帰るか」

「え、えっと、その……」

「ん？」

「エステーラにい、行きませんか……？」

「……いいけど」

ペアとあからさまに嬉しそうな表情を浮かべる志乃。

今まで一緒にいた間宮が少しづつ旅立とうとしてるのを見て、寂しくなっているのだろうか。

「エステーラ行くの久しぶりだな」

「あそこのリーフパイ美味しいですよ」

「……そういえば、佐々木とまともに関わり始めたのつてエステーラでだったな」

ほんの少し前の出来事なのに、懐かしくも感じる。

「……佐々木？」

「……」

「おーい、佐々木ー？」

「……ですから」

「ん？」

キュツと、後ろから服の裾を少し掴まんで顔を上げた。

「2人きりなんですから……志乃つて、呼んでください……」

顔を赤らめ、恥ずかしそうに小さな声で呟く。

上目遣いとか卑怯だと思います。

「あー……志乃」

「っ」

こんなの、男として我慢するのは無理だろ。

「帰り、遅くなっても平気か？」

「あつ……。はい……」

すまん、間宮。

お前が一生懸命な時に俺達は――

第3話 佐々木 志乃との関係 ☆

佐々木志乃とどうい関係かと聞かれると返答に困る。

幼馴染……という言葉が妥当なところなのだが、幼少期の頃から一緒にいたわけではない。

何より、とある事情で俺が5歳の頃からは全く交流がないわけ……。

「服、脱ごうか」

「……はい」

慣れた手つきで防弾制服を志乃は脱ぐ。

現れたのは、豊満な胸に安産型のお尻を包んだ赤い下着姿。

まるで、1つの芸術品のように見える。

「志乃」

「っ♡」

エステーラでちよつとした買い食いをし、今はとあるラブホテルの一室。

下着姿で立ったままの志乃を優しく抱きしめた。

「あっ♡」

ハグで背中にまわした手をお尻へと移す。

下着越しでも柔らかく、もっちりした臀部が指の隙間からハミ出す。

「んんっ♡」

腕の中で、悶える志乃。

顔は見られたくないからか、俯いている。

「顔、上げろ」

「っ♡ちゅっ♡」

潤んだ瞳と目が合い、唇を重ねた。

「んちゅ♡ちゅぱっ♡はあっ、んむ♡」

勿論、舌も絡める。

「んれ♡れるお♡っ♡ちゅっ♡」

どこで息継ぎをすればいいのかわからないくらい、唾液を交換しな

がら貪りあう。

「んっ♡んっ♡……………っ、はあ♡」

「…………大丈夫か？」

「ふえ♡」

ダメだこれ。

完全にイク寸前で蕩げ顔になってる。

膝が既にガクガクになってきていたので、ベッドへと横にさせた。

「はあ……………♡はあ……………♡」

「触るぞ」

「…………うん♡」

仰向けの志乃に覆いかぶさり、揺れる胸を両手で掴む。

「あん♡」

ブラの感触が一見邪魔に思えるがそんなことはなく、いいアクセントといっても過言ではない。

こわごわとした下着に納まる巨乳の柔らかさが逆に引き立つような気がしてくる。

「はっ♡あっ♡」

覗く地肌に指が触れば、むにりと沈む。

「ふう……………♡」

自在に形を変える魅惑の塊に興奮が昂る。

揉む手が徐々に早くなってゆくと、ある変化が起きた……………。

「あっ♡♡」

「っ」

ブラがずれ、乳首が露わに。

同時に、こちらも我慢が限界になった。

制服を脱ぎ捨て、起立した分身が姿を見せた。

「あ、あつい……………♡」

下着を完全にずらして形の良い胸がぷるりと揺れ、全貌が露わになる。

手を添え、勃起した逸物を下から谷間へと挿れた。

「ああ……………っ」

「む、胸の間で♡おちんちんが♡あつ♡」
腰を前後に動かす。

志乃の胸を使うパイズリは堪らなく心地良い。

「んあつ♡ちんちんっ♡あつくて、ふるえて……♡」

先走りが溢れて止まらない。

両手が挿んでいる胸の感触で喜び、股間は谷間の圧迫感で打ち震える。

「ぬるぬる♡して、きてえ♡」

たぱん、たぱんと音が響く。

「いつでも、いいですから♡」

挿挿が激しく、早くなる。

「いっぱい♡おっぱいの中に♡」

身体が震える。

「射精……してえ♡」

「っ！うー！」

「~~~~~っ♡」

彼女の望み通り、白濁が胸の間で迸る。

「あっ♡すごい♡びゆるびゆるっ♡びくびく、んあ♡」

チンコが谷間の中で暴れる。

「はあ♡まだ♡出てるう♡」

精子が勢いよく飛び出し、谷間から漏れ出た。

「こんな♡……♡ああ……♡」

志乃の肌が、薄く桃色に染まる。

蠱惑的な笑みを受けべ、額に汗が滲んでいるのがわかる。

「まだ、元気ですね♡お掃除、しましうか♡」

その言葉を聞き、谷間から抜いた肉棒を志乃の口元に寄せた。

「あむ♡じゆる♡ちゅぱ♡」

亀頭を丸ごと啜えこまれる。

「ちゅっ♡じゆるっ♡んあ♡」

「っあ……」

「んんう♡んぐ♡ちゅぴっ♡」

尿道に残った精液まで綺麗にしようと、吸いつかれる。

「ぢゅぱっ♡はあ♡ちゅ、んっ♡……………ちゅぽ♡」

「ふっ…………。続きは？」

「…………する♡」

●
「びしょ濡れだな」

「やつ♡見ないでください…………あう♡」

脚を開かせるとショーツを通して愛液が溢れかえっていた。

まだ元気の逸物に避妊具を被せ、先端を秘部へと当てる。

「はう♡♡」

「挿れるぞ」

「っ♡はっ♡~~~~っ♡」

腰を押し進む。

膣肉を掻き分け、最奥の子宮口をコツンと叩いた。

「あっ♡あっ♡あっ♡」

目を見開きながら、喘ぎ、快感に震える。

「やつ♡イツ♡イツちやいますう♡ふっ、くっ♡」

脚がガクガクと痙攣し——

「うくっ♡♡♡イクッ♡♡♡~~~~っ♡」

——達した。

…………が。

「うう…………っ♡あっ♡やつ♡」

俺の方はまだ、満足できていなかった。

「りゃ、りゃめ♡イツて♡イツてる♡イツてるっ♡」

「悪い…もう少し、だけー！」

「ん♡ん♡っ♡」

抽挿を続ける。

ピストンの度に、結合部から混ざり合った液が漏れ出す。

「はっ♡あゝっ♡ぐう♡うううう♡」

志乃の両腕を引き寄せる。

「ふっ♡ぐっ♡っ♡」

引き寄せながら、体重を後ろに預けて腰だけを前後に。

「ひゃっ♡ふか、いっ♡いっ♡うっ♡」

両腕に挟まれた胸が潰れ、揺れる。

「おちんちんっ♡きもちっ♡おくまでっ♡ああ♡イクう♡」

非常にえろい姿が目の保養になり、興奮が冷めない。

むしろ、たった今2度目の絶頂を迎えた志乃のせいでさらに加速する。

「ハアっ！ハアっ！もう………！」

「あひっ♡ん、あっ♡はっ♡」

「出る………！」

「あゝっ♡♡♡あゝゝゝゝっ♡♡♡ふっ♡♡♡」

精子がゴムの中に吐き出された。

「ゝゝゝっ♡はっ♡んっ♡ゝゝゝゝゝっ♡」

膣内が精を奪おうと動く。

絡みつくようにねっとり熱く、催促する。

「で、るっ♡おなか、おくで♡あついの………っ♡」

射精が長い。

ゴムが破けないか心配になる。

「あふ………♡はあ………♡すっ♡い♡」



「スー………スー………んっ」

情事を致して眠ってしまった。

(もう少ししたら起こすか)

遅くなりすぎると志乃の親が心配するだろうしな。

風呂にも入らなければ。

(にしても、10年ぶりに会ってこんな関係になるとはなあ)
彼女が5歳の頃なんか擦微かにしか覚えていない。

俺の方はこんな状態なのに、志乃はハッキリと覚えていた。

サラリとした黒髪を撫でる。

「んう……」

「……………」

(可愛い。……ハッ！)

いかんいかん。

いくら黒髪ロングの和風美人がタイプだからといって——

「はあ……」

再会した時はこんな風に依存し合うとは思っていなかった。

(いや、あの人が予言めいたこと言ってたっけ。……くそっ)

志乃が知らない空白の10年間。

時折、何があつたのか聞いてくるが教えることはできない。

言えば彼女は——

「ん？」

「……………なさい……………」

寝言だろうか。

何か、呟いている。

「……………ごめ、ん、なさい……………」

「……………」

「りっ……………君……………。いかない、で……………」

いつの間にか、握られた手。

その手はすぐにでも解けるくらい、酷く弱い力が込められていた。



いくら謝っても、私の心は晴れない。

彼が笑って許してくれても、私の心は暗いまま。

彼がいなくなつたあの日から、彼の事ばかりを考えて、好きという
気持ちに気が付いた。

でも、言えない。

私には、言う資格がない。

だから、この気持ちはずっと胸に仕舞っておく。

そう決めたのに、彼を求めてしまう。

ごめんなさい。

——りっ君、ごめんなさい——

第4話 武偵殺し

最近、巷で爆弾事件が多発している。

これは原作通り、『武偵殺し』が動いている証拠である。

そして、間宮が神崎先輩の戦姉妹になったおかげで、パラグライダーを使用して遠山先輩をチャリジャックから救出セーブされる件があったのを耳にした。

無事に、空から女の子が降ってくると思うか？……が起きたようで一安心。

あの人にも連絡がてら伝えたら大変安堵していた。

で、今日は休日。

私服に着替えた俺は最低限の装備を携え銀行に来ていた。

クエストの報酬金確認と振り込みや引き落としの確認に来たんだが……。

「おら！ 大人しくしてろお！」

「とつとと金を出せ！ 金を！」

（せっかくの休日が……）

銀行強盗2人組がマスクを被って乱入してきた。

「そこのお前、このバックに金を詰めろ！」

「早くしねえとこの女が死ぬぞ!？」

「ヒイツ!？」

「わ、わかった！ わかったから！」

マスクの1人……こいつをAとして、Aは職員と思われる女性を人質に頭に銃を突き付けている。

もう1人の男性Bは職員を急かしている。

「他の奴らも動くんじゃないぞ！ 動いたらぶっ殺すからなあ!？」
急かしている奴の方が偉いのかな？

そいつも銃を持っており、怯える利用客へと銃を向ける。

（どうするかなあ……）

俺は今、奴らの死角になる壁越しにて様子を伺っている。

（男が2人の、両方とも銃持ち。片方は人質を盾にしている）

武偵は武偵法に反することはできない。
どうにかして強盗を殺さず無力化し、民間人と銀行職員も助けな
いと。

迅速かつ、冷静に。

武器はハイキヤパとサバイバルナイフと手錠。

そして――

(コレは……使わなくてもいいか)

ベルトに付けた錠剤タブレットケースを見やる。

少し考えてから、視線を外した。

「ッ！」

とつとと終わらせよう。

隠れていた壁から飛びだし、発砲を1つ。

「ガッ!」

「何だ!」

銃弾はAの武器を持つ手に当たった。

「てめっ――」

(間に合う)

Bがこちらに照準を合わせようとする間に接近。
間合いに入った所で、蹴りを顎へと掠める。

「――アッ」

上手いこと脳を揺らし、失神を引き起こす。

あと1人。

「ぶっ殺す!!」

「危ねっ……!」

片手を血だらけにしたAがナイフで切りかかってきた。
(どっかに隠しもっていたか)

横薙ぎ。斜め払い。突き。

銀色の刃が我武者羅に襲ってくる。

「ウラァー!」

「シッ!」

金属同士がぶつかる。

右手で逆手に持ったナイフがギシギシと鏝迫り合う。
銃は、これ以上使うのは抑えた方がいいかもしれない。

仮にナイフを持つ手をまた撃てたとして、この男がその後どんな行動を起こすのか。

もしかしたらその場で舌を噛み切ったり、他に隠し持った武器でまた人質を取るかもしれない。

最悪の予想がいくつか頭をよぎる。

(とすれば、この間合いがベストか)

左手に持つハイキヤパ。

それを、上に放り投げる。

「は?」

Aの視線が一瞬そちらへ向き。

——カチャン

「は?」

奴が気づいた時にはナイフは取り上げられ、両手は後ろにまわされ手錠を着けられていた。

「はあああああつ?! 何だこりやあ!?!」

「うっさいぞ。じっとしてろ」

足首にも手錠をつけて身動きができないようにする。

気絶してるBも同様に拘束した。

「あー、もしもし。武偵高、情報科所属の藤です」

休日の予想外の出来事は、無事に事なきことを得た。



かに思えたが、別の問題が。

「入りたくねえ……」

心の底から溜息と一緒に吐き出される心情。

銀行を後にした俺は今、とあるファミレス前へとやってきた。

何故来たかと言うと、とある人物からメールで呼び出されたからである。

本当に。ホントに入りたくない。

しかし、無視した場合の後が非常に恐ろしい。

「入るか」

決心し、ドアを開く。

来客を報せるベルが鳴った。

「いらつしやいませ。何名様ですか？」

「2名なんですけど、先にもう1人が来てるみたいで……」

「かしこまりました」

出迎えてくれた店員さんに事情を伝え、件の人物を探す。

「……いた」

すぐに見つけた。

桃まんが大量に積まれたテーブルへと向かう。

「お疲れ様で——」

「遅いわよ!!!」

今すぐ指定するファミレスに来なさい。

そんな一方的なメールを寄越した彼女、神崎先輩が桃まんを手を開幕早々怒声を放った。

第5話 独唱曲の依頼

休日だというのに、神崎先輩は防弾制服を着ている。

「……よく食べますね」

「桃まんは至高の一品よ。あんたも何か頼んだら？」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

店員さん呼び、コーヒーとサンドイッチのセットを頼んだ。

その間も、神崎先輩はムシヤムシヤと桃まんにありついていいる。

これだけ食べて見た目に変化がないのは果たしていいことなのか、悪いことなのか。

(にしても、やっぱちっこいなあ)

間宮より若干大きいくらいだろうか。

「……今失礼なこと考えなかったかしら？」

「ソナコトナイデス」

怖い怖い。

鋭い直感持ちは、理屈じゃ通らないことがあるからおっかなくて仕方がない。

「それで、用件は何です？」

早く済ませるためにこちらから切り出す。

頭を抱える案件を増やしそうな人と長くいたくはない。

これが終わったら志乃に連絡でもしよう。

柔らかおっぱいに顔を埋めて癒されたい。

「単刀直入に言うわ。藤 律紀、あんたあたしの奴隷になりなさい」
「お断りします」

ガタン、とテーブルが音を立てる。

即答で断られると思っていなかったみたいだ。

「ど、どうしてよ!? 理由を言いなさい!」

「いや、いきなりそんなSMプレイを求められても困りますって」

「エ、エ、エ、エスエムプレイの話じゃないわよ!?」

「じゃあ何の話ですか」

「チームよチーム! チームの話であたしはしてんのよ!」

知ってた。

ぜえぜえと顔を赤らめながら息を切らす先輩。

この姿写真でも撮れば高く売れるのでは？ 特に間宮辺りに。

「でしたら最初からそう言ってお下さいよ。奴隷になれ、だなんて言われてもわけわかんないですって」

「う……」

苦い表情で固まった。

「その様子だと、同じような誘い方を他の人にもしてますね？ そして察するに、先輩が欲しい答えは貰えなかったと見ます」

「……正解よ」

全くこの人は……。

「相手は最近付き合ってる噂の遠山先輩ですか？」

「つつつ、付き合ってるんかないわ!?!?」

「どうどう先輩落ち着いて。ただの噂話ですから」

「ぐうっ……！ そうよ。あんたの言う通り、あのバカキンジはあたしの誘いを断ったわ」

「昼行燈の女嫌いですからね」

今は女嫌いというわけではないと思うが。

「でも諦めるわけにはいかないの。あたしのイメージする最高のチームにキンジは必要なんだから」

「遠山先輩はともかく、俺は必要ないと思いますが」

「あたしは必要だと思ってるの。中・遠距離を主に前衛もサポートが可能な幅広い技能を持つてるのは知ってるわ。情報科のランクはAでも、実質Sみたいなものだしね」

「……………」

恐らく遠山先輩のように色んな所から情報を仕入れてきたのだろう。

加えて、俺とクラスメイトの戦姉妹がいるしな。

「どう？ 働いてくれる分の報酬はちゃんと払うわ。何なら、ランクの方だって——」

「お断りします」

「……納得させるだけの説明を頂戴」

「俺は基本ソロで動く人間です。なので、チームに入れと言われてもはいわかりましたなんて言えません。連携も取れるか怪しいですし」
チームにおいて互いに連携するのは必須だ。要といっても過言ではない。

長所と短所を理解し合い、カバーを行いながら行動するのがチームだ。

「仮に入ったとして、神崎先輩と遠山先輩へ俺からのフォローは逆に悪影響になりますよきつと。おふたりとも強い癖があるし」

問題はまだある。

「あと、俺にも一応プライドがあります。もし、自分のやり方に口出しされたらやる気無くしますよ。神崎先輩にも仕事するにおいて譲れないものつてあるでしょう?」

「……そうね。それはあたしだけじゃなく、キンジやレキ、あかりにもあるものよね」

「それと、最後にもう一つ」

「?」

「お待たせしました。ご注文の品でございます」

運ばれてきたコーヒーとサンドイッチを一口入れる。

会話の小休止を挟んだ。

「先輩にやらなきゃいけないことがあるように、俺にもあるんですよ。それが終わるまでは、深入りはできませんので」

「あんたは、あたしのことをどこまで知ってるのよ?」

……うーん、どう答えたものか。

「武偵殺し」

「っ!」

「気を付けて下さい。奴の策は綿密ですから」

「なんで知って——いいわ、もう。そっちが深入りしないって言うなら、あたしもそれに習う」

「そうしてくれると助かります」

勘が働いたのだろうか。

えらく引き際が良い。

「キンジについても何か知ってたりする？」

と思いきや、次に出てきた問は気が滅入るものだった。

「大したことはなにも。遠山先輩は自分を隠すのが上手いですから」

「もし、何かわかったら教えて。メールを送ったアドレスからでいいわ。見合う報酬を渡すから」

「了解です」

「それと、最後にこれを……」

渡されたのは1枚の書類。

中身をザッと見てみる。

「あんたの戦姉妹にこれを渡して欲しいの」

「……なるほど。明日の放課後くらいに会う予定なんでその時に渡しますね」

「頼むわ。要件はこれで終わりよ」

「じゃあ、俺はこれで」

カップと皿を空にして席を立つ。

出口に向かおうとしたところで、先輩へ振り返った。

「神崎先輩」

「？」

桃まんを啜える先輩と目を合わせる。

「間宮のこと、よろしく頼みます」

「言われるまでもないわよ」

そう言い残して、店を出た。

「……もしもし、志乃？ 今から出てくれるか？」

その後、どのように休日をご過ごしたかはご想像にお任せする。

第6話 律紀と戦姉妹

「疲れたよ〜」

「身体検査はなかなかハードでしたね……」

「アタシはそっちよりも、先輩に手も足も出なかったのが悔しいぜ……」

休日は明け、いつものメンツで集まり談笑。

どうやら3人は神崎先輩の元で身体測定を行ったらしく、最後にマッスル・リベンジャー やった運動神経測定が堪えたようだ。

運動神経測定とは何かというと武貞高名物の1つであり、室内を想定した格闘戦のことである。

その内容は引率した先輩のストレス解消を兼ね備えた対決で、中には派手に後輩にあたる輩もいるらしい。

「だいぶキてるみたいだな」

「やっぱSランクってすげーってことがわかった」

「でも、力量差を改めて実感できたのはいい経験ですよね」

「あつという間にやられちゃったもんねー。リツ君は何してたの？」

「射撃訓練と格闘訓練と分析訓練。あとはみんなと同じように身体検査受けて、シメに模擬戦やった」

「リツ君も検査でグルグル回るやつやったの？」

「グルグル？ ……ああ、回転椅子のことか」

あれの正式名称って何なんだろうか。

昔やってたクイズ番組では、トルネードスピントしか言っていないな
かった気がする。

「やったなああれ。寝てたけど」

「へ？」

「あの状況で寝られるんですか……？」

「やる前に訓練3つやって疲れてたんだよ」

「だからってフツ―は寝るもんじゃないぞ」

そうは言われても眠いもんは眠いんだ。

寝たいときに寝るのが健康的だと勝手に思っている。

「ん、ふあ……あふ……」

ふと、志乃が欠伸をした。

「志乃ちゃん、眠そうだねえ」

「あ、ご、ごめんなさい。つい……」

「珍しいな。夜更かしでもしてたのか？」

「え、ええ……。まあ……」

顔を赤くし、チラリとこちらを見やる。

目が合うとすぐに視線が外された。

「で、先輩からの評価は？」

「実力不足はしようがないけど、息があつてたからってことでB+も
らえたよー」

「へえ、良かったな」

神崎先輩が連携を褒めるって結構凄いことだと思っけどな。

「律紀さんはどうでした？」

「全部Aだった」

「うわー……。お前もうSランク取れよー」

「嫌だっつの」

何と言われようとSランクだけは御免である。

ふと、時計を見ると放課後になってからそこそこ経っているのに気
付いた。

「じゃ、俺は用事あるからこれで」

「はい」

「また明日ね！」

「じゃあな〜」

後ろ手に軽く手を振り、カバンを片手に教室を出た。



「平賀センパイ。いますかー?」

やってきたのは装備科。

機械工作の天才、平賀文先輩のところ。

「あ！ 藤君なのだ！ いらっしやいなのだー！」

「どうも、急に来てすいません」

改造や工作の腕は確かな物だが、稀に行き過ぎた問題行動を起こすことがあるためランクはA。

俺と同じである。

「実は、頼まれた物を取りに来まして」

「ほうほうー！」

「えっと、これに書いてある物なんですけど……」

ポケットからメモ用紙を取り出して渡す。

先輩はそれを受け取ると、フムフム言っつて部屋の奥へと行っつてしまった。

しばらくして……。

「はいこれ！ 頼まれていた物なのだ！」

机の上にガシヤリと置かれた物。

見れば、電子コードや端子プラグといった機械類の山が聳え立っている。

「……何か袋とかありますか？」

「あ、忘れてたのだ！」

持ってきたもらった丈夫な袋に入れ、お礼を述べる。

「ありがとうございます。また、何かあつたら来ます」

「はいなのだ！ いつでもお待ちしてるのだー！」



コネクト通信科。とある部屋の前。

「失礼しまーす」

一応ノックをして入室。

中に入ると、とある人物がヘッドフォンを付け、PCへと向かっている。

「先輩、お疲れ様ですー」

……返事はない。

どうやら集中しているため、こちらに気づいていないようだ。

「……………」

差し入れて買ってきた缶コーヒー。

ゆっくり忍び寄り、ソレを首筋へとくっ付けた。

「ひあつりっ!」

「ちよっ」

甲高い声を上げた拍子に、身体が飛び上がって椅子がひっくり返る。

「ぐえっ」

「あうっ!」

怪我をさせないように、クッションになる。

柔らかい身体が上に乗っかり、甘い香りが鼻をくすぐる。

「な、なんですかあ……………」

「ごめんなさい先輩。俺です」

「へ……………」

眼鏡レンズの向こうにある瞳と目が合う。

「……………」

言葉にならない驚愕の音が響いた。

「りりり、りっ、律紀君……………」

「お、お疲れ様です。美咲先輩」

彼女の名前は、なかそらち中空知 みさき美咲。

通信科所属ランクBのオペレーター。

——俺の戦姉妹である。

第7話 中空知 美咲との秘密 ☆

本来、原作において遠山先輩に好意を持つ人には、なるべく自分から関わらないと決めていた。

俺が請け負う依頼の都合、そうあるべきだったのだが……。

「頼まれてた物、ここに置いてきますね」

「あああ、ありがとう……」

袋に入った機械類を部屋の片隅に置く。

ベッドに腰掛ける先輩を見ると、隣に1人分の空間が空いていた。

「隣、いいですか?」

「う、うん」

初めて関わったのは、とあるクエストで先輩のオペレーティングを受けた時。

原作を知ったので、ああこの人が……と思ったのも束の間、自分にはない彼女の通信技術に衝撃を受けた。

まるで見えているような的確な状況判断に、寸分も狂いが無い正確な情報。聴覚だけで人はここまで可能なのかと感嘆せざるを得なかった。

美咲先輩の技術を少しでもモノできたらと思いい戦姉妹申請をし、今に至る。

「あ、それとこれ。今話題の神崎先輩から渡してくれって」

カバンからクリアファイルに入れた書類を渡す。

「ごっこ、ごめん、ね? い、色々持ってきて貰って……」

そんな凄い先輩がランクBなのには理由がある。

それは、極度の上がり症と絶望的なまでの運動音痴。

「気にしなくていいですって。俺は美咲先輩の後輩で戦兄弟ですから」

会話の際、異性相手だと緊張も相まってテンパリ具合が更に上がる。

半年かけて気を使いつつ指導を受け、距離が縮まったかなと感じている。

(最初の頃は大変だったなあ)

申請試験の申し込みの際は気絶したりと大変だった。

「そういえばその書類、緊急時のオペレーターینگ依頼みたいですけど……。俺から返信しときましようか？」

「だ、大丈夫。これくらい、は自分でやらないと……！ 律紀君に、お世話になりっぱなしじゃ、いけないから……」

「……わかりました」

こうして直に接してみると、先輩が一生懸命に頑張ってるのがよくわかる。

ひたむきな姿は、俺にいい刺激になる。

「あ、あの」

「何です？」

声をかけられ、先輩の方を見る。

「……んっ♡」

視界に映るは、キス待ちの体勢。

目を瞑り、恥ずかしながら顔を上にあげる美咲先輩が。

「……」

「……んっ♡ん♡」

飛んで火にいる夏の虫。

そんなつもりはなかったのに誘惑に駆られ、誘われるがまま唇を重ねる。

「ちゅ♡んっ♡……んれ♡」

舌がぬるりと侵入してくる。

奥手な彼女から求められると、興奮は一気に昂まってきた。

「れろ♡ちゆるっ♡んっ♡んんっ♡」

細い腰を抱き寄せる。

「っは♡あっ♡だ、だめ……♡」

「誘ってきたのは先輩ですよ」

背中に回した右手で後ろから乳房を揉む。

星伽先輩に匹敵する大きな胸をむにむにと揉み解す。

「ふっ♡んくっ♡」

ピクンピクンと身体が震える。

少し離れていて距離はいつまにかゼロになっていた。

「もっ、もっかい♡キス……むう♡」

ねだられたのでそれに応える。

応えながら、空いている左手をスカートの下から入れる。

「ちゅぷ♡れっ♡っ♡」

指先が、下着越しの秘裂に触れる。

「んっ♡んぷっ♡はあ♡ちゅう……♡」

パンツの上から割れ目をなぞると、震えは一層大きくなる。

段々と湿り気が滲む。

「んっ♡れるれっ♡ちゅ♡ちうっ♡」

パンツをズラして中指を入れ、浅い所を刺激する。

右手も、制服の中に突っ込んだ。

「あんっ♡」

甘美な声が聞こえる。

どうやらブラはフロントホックらしいので、片手でも容易に外せた。

支えられていた器が無くなると、ゆさり……と自重で揺れる。

「あっ♡あっ♡……あうっ♡」

「先輩」

「はあ♡律、紀……君♡」

「もっ、キスしましょう」

「んむっ♡ちゅ♡」

胸を揉む手の平にしこりを感じる。

膣内に入れた指に愛液が絡まり、音を立てる。

「んっ♡んっ♡」

潤滑液が増し、クチュクチュ鳴りながら指を出し入れ。

上の方は、水饅頭のようなお餅のような乳房を堪能する。

(あく……やっぱでっかいなあ……最高)

恐らく、志乃よりひとまわりくらい大きいだろう。

手の平からハミ出す脂肪と感ずる質量がまるで違う。

俺は別におっぱい星人ではないが、大きい胸は非常にいいと思っ
ている。

例え小さくてもそれはそれで。

念のためもう1度。

おっぱい星人ではない。

「んっ♡っ♡んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡」

美咲先輩の蠢いていた舌の動きが鈍くなる。

断続的だった痙攣も止まらなくなってきた。

「んんう♡んっ♡んっ♡ひゃ♡むあっ♡」

乳首を捻る。

「っ♡♡♡」

「~~~~♡♡♡んっ♡♡♡んっ♡♡♡んっ♡♡♡」

口を塞がられてるからか、息を求め呻く。

「んっ♡んむ、うっ♡」

スカートの下ではぷしやりと、噴水の如き絶頂が。

「ちゅ……♡っばあ♡」

脚を開いたまま、膝がガクガクと笑っている。

「はあ♡っ♡はあ♡……♡うっ♡」

快感に打ち震える様を見て、こちらも我慢の限界を感じた。



きっかけはなんてことのないことだった。

「あっ♡♡ひっ♡んっ♡っく♡」

その日は2人で深夜まで作業に没頭していた。

多分、疲労とか眠気とか色々と蓄積していたのだろう。

流れで互いの手を取り、気づけば唇を重ね、身体も重ねていた。

「はあっ♡♡あんっ♡♡」

ベッドへ仰向けに横たわる女体に覆いかぶさる。

開かれた脚の間に収まり、クビレに手を添えて動く。

「やつ♡そ、そこ♡ついちゃ♡だめでっ♡」

激しく揺れる胸がピストン運動の苛烈さを示す。

「つぐ♡ん♡っ♡そこ♡、はっ♡よわ、い、からっ♡」

「知って、ます。っ!」

「ほっ♡」

端正な表情を隠せるくらいの長い黒髪が、汗で張り付いている。

掛けたままの眼鏡の向こうにある瞳は、涙が光っていた。

「ふううう♡うううううっ♡」

「はっ! セン、パイ……!」

「~~~~♡~~~~♡~~~~♡~~~~♡」

「出る……。っ、ぐう!」

白濁が弾け飛ぶ。

「あ~~~~♡♡♡あ~~~~♡♡♡い、うう~~~~♡♡♡」

汚い喘ぎ声を出しながら、先輩も達した。

ゴムに暖かい温もりが完成する。

「……んっ♡おちん、ちん♡せんぶ、出せた?♡」

「っ」

「まだ……いいよっ……♡」



帰り道にて。

「律紀君」

「っ! 佐々木……」

校門を出ると声をかけられた。

見れば、志乃が物憂げな表情で立っていた。

「間宮達と一緒に帰らなかったのか?」

「ええ。……その、一緒に帰りたいなって」

ゆつくりと近づいてきて、カバンを持つ手とは逆の手。

左手を握られる。

「……私も」

指の一本一本が絡む。

「……私にも、くれませんか?」

彼女がどういう意図で言ったのかはわからない。

それでも、俺は時間の許す限り志乃を求めることにした。

第8話 武偵誘拐事件

日曜日。

俺達4人は今話題のラクーン台場、遊園地にきていた。

「こ、怖かった……」

「やりたいっていったのは間宮だろ」

「高いなあー」

「いい眺めですねえ」

間宮が4人分のタダ券を持っていたので、誘ってもらい今に至る。観覧車の眺めを楽しむ。

ちなみにさつきまで間宮はターザンロープみたいなので遊んでいた。

「うわあ……。人がちっちゃーい！」

「あかりはいつも見上げてばっかりだもんなあ」

「り、律紀さん」

「ん？」

「……今度は、2人で来ましょう？」

「あー……そだな」

それとなく返事をする。

休日とはいえ大勢の人で溢れかえっている光景はさすが、テレビで取り上げられるだけはあると思えた。

『ッ！』

突如、全員の携帯が鳴り響く。

「武偵高の周知メール？」

「現場は——ここだな」

「マ、マジか……」

「ケースF3Bは誘拐・監禁された、だよね……。O2って何だっけ？」

「原則2年以上が動け、です」

続けて内容に目を通す。

「犯人は防弾装備^W、か^E」

「つてなると、プロの可能性大だな」

誘拐されたのは、特殊捜査研究科インターン（中3）の島しま麒麟きりん。
原作通りの流れだ。

「近隣生徒からの報告ですと、早い生徒でも到着は15分はかかるそうです」

観覧車が丁度一周し、急いで降りる。

「どうする？ 動くか？」

「で、でも、私達だけでなんて……」

「……………」

「行こう」

『っ！』

間宮の瞳が、決意を固めた。

「今この子を助けられるのは、あたしたちしかない！」



場所は変わって、ラクーンランドホテル。

捕らわれた島が機転をきかせ、こここの703号室にいることが判明。

作戦はセオリーに沿って挟み撃ち。

火野がアサルトライフルMagpul MASAADAを背負い窓の上から。間宮と志乃はドアから潜入。俺は後方からのバックアップと退路の確保だ。

「スウー……はあっ！」

志乃が刀を扉の隙間へ勢いよく差し込み、強引にこじ開けた。

「武器を捨てて！ つて、わあ！」

「あかりちゃん！」

（やべっ！）

志乃が転んだ間宮に駆け寄る間に、身を潜める。

「ハハッ、人質と武器が増えたぜ。やりましたね兄貴」

「随分とバカな武偵だな。しかも、女ときてる。いくら何でも俺達を

舐めすぎじゃねえのか？」

ギリギリセーフ。

俺まで見つかつたらどうしようもなくなるところだった。

(……そろそろか)

発砲音が何発か炸裂する。

火野が窓の外からぶっ放した音だ。

(今……！)

ハイキヤパを片手に突入。

踏み入れると、島が割れた窓から飛び降りようとしているところだった。

「3、2、1。きやはーんっ☆」

ふわりと重力に従って落ちる寸前に、ロープを振り子のように使った火野が抱きかかえ、下のプール目掛けて落ちようとする。

「クソツッ！」

「ライカ!!」

兄貴と呼ばれていた奴が落ちてゆく火野に、持っている銃を構える。

(やらせねえ)

「動くんじゃねえ！」

「あかりちゃん！ 危ない！」

もう1人の手下が間宮に銃を向けようとするが、それは失敗に終わる。

とびうがち
鳶穿。

カウンターでしか発動できない間宮の技。

すれ違いざまに、手下の銃を素早く奪い取った。

「やめてー!!」

狙うは、銃身。

ハイキヤパがひとつ鳴く。

放たれた銃弾は吸い込まれるように金髪の構える銃へと進み……。

「つづー！」

甲高い音を立て当たると、構えが崩れた。

「ガキ共が！」

「もう1人いたのかよ！」

「動かないでください」

「抵抗するな。もう終わりだ」

サングラスを掛けた金髪のリーダーに志乃が刀を首筋に添え、手下は俺が銃を突き付けて身動きできなくなる。

「ライカー！ 無事ー!?」

間宮が下へ声を掛ける。

不安そうに垂れた眉がペアと明るい顔に変わる。

どうやら無事みたいだ。

原作に習って、俺がいなくても良かったと思うが万がいちがあるからな。

念には念を入れて、だ。

とにかく、これで一件落着……。

(……何だ?)

おかしい。

鍛えられてきた経験と勘がまだ何か訴えている。

「……クク」

「……何が可笑しいんですか」

金髪が不適に笑う。

「ヒヒ、ヒヒヒ……」

手下の黒髪も、同じように笑う。

「間宮、佐々木。気を付け——」

後ろから殺気。

「ッ!?」

下から抉るような拳が迫る。

(躲せねえ……!)

常人よりも遥かに大きな拳が脇腹に刺さる。

「グウツ……!」

寸でのとこで左腕を盾にできたが、ミシリと嫌な音を立てた。音からしてヒビが入ったかもしれない。

強烈な衝撃で身体が少し浮く。

「がっ！」

その隙を殴ってきた主は見逃さない。

次に迫る攻撃を認識できず、振りかぶった拳が頭部へ振り降ろされた。

(3、人目……)

目の前が、暗く閉ざされた。

第9話 逆鱗

何が起きたのかわからなかった。

音のする方に目を向けると、りっ君が床に倒れていた。

「りっ君!!」

あかりちゃんの叫び声と、頭から血を流して気絶する彼の姿を見て数秒。

ようやく状況を飲み込めた。

「りっ君!! あっ……!」

「動くんじゃないえ」

「志乃ちゃん!」

「お前もだ」

誘拐犯の金髪と黒髪がいつの間にか銃を持ち、私達に構えていた。

「つたく、どこにいつてやがった!」
アイアン 鉄!」

「ソーリー。ナカナカトイレカラハナレラレナクテネー」

アイアン、と呼ばれた浅黒い肌を持つ巨体の男は悪びれる様子もなく片言の日本語で謝る。

足元のりっ君はピクリとも動かない。

「戦闘屋の癖によお……。危うく俺ら捕まるところだったんだぞ!」

「ソレハソレハ。デスガ、コノテイドノテキナラゾウサモナイデス」

「ならいいさ。お前を雇う金も安くはなかったんだからな。さて……」

「ぐうっ!」

金髪に手首を掴まれ、後ろ手に捻られた。

刀が床に落ちる。

「これで、何にもできねえ」

「やめっ! 離し——ムググ!」

「うるせえ口は塞いじまうにかぎるな」

あかりちゃんは手足が縛られ、猿轡を咬ませられてしまった。

「1人には逃げられちゃったが、結果オーライだ。仕切り直してまた金の交渉だ」

「兄貴。この男のガキはどうしますか？」

「……鉄」

「コロスツモリデナグツタカラ、シンデルカモネー」
「ツ！」

その言葉を聞き、私は拘束を振り解こうと暴れた。

「りっ君！ いやあ！りっ君!!」

「……うるせえ！」

「痛っ！」

頬を叩かれる。

「ひのひゃん！」
志乃ちゃん

「ズイブントイキガイイネー」

「……うっ……り、りっ君……」

伏した彼へと手を伸ばす。

涙で視界が滲んできた。

戦闘屋が近づき、私を見下ろす。

「コノオンナ、スコシカリテイイ？」

「あ？ ……ほどほどにしろよ」

「ひゃめてえ!!」

剛腕さながらの片腕で持ち上げられ、放り投げられる。

「っ……！ ウウツ！」

首を掴まれ、持ち上げられた。

「ハハハ、モットヒメイアゲテミロ」

「カツ……！ カハツ！」

苦しい。

呼吸がどんどんできなくなる。

（たす、けて……）

視界が薄くなり始めた。

（誰、か。たすけ、て……）

死にたくない。

もつと、生きたい。

生きていたい。

(たす、けて。りっ君……！)

「おい」

『ツ！』

絞められていた力が緩まる。

床に崩れ落ちた私は酸素を求めながら、聞こえた声の方を見た。

「ゴホツ！ゴホツ！ あゝ あ……い！」

「てめえら、何してやがる……！」

そこには、大好きな彼の姿があった。

「りっ君！」



起きた時に見たその光景は、俺にとって耐えがたい物だった。間宮はガツチリ拘束され、いつ男に弄ばれるかもわからない状態。そして……

「マサカ、イキテイルトハオモワナカッタ」

俺を殴り飛ばした黒人らしき大男が、志乃の首を絞めていた。

「なんだ、ボロボロみてえだな」

「おい、鉄。トドメをさせ」

「オーケー」

周りが何か話しているが、今はどうでもいい。

——志乃が、泣いている。

「誰が泣かせた」

「……ワッツ？」

「誰が、その女を泣かせた……!」

言い表せない感情が溢れてくる。

よく見れば、頬も腫れているのがわかる。

「ダレダロウトカンケイナイデス。オマエハシヌンダカラネー」

「……もういい」

敵は3人。

邪魔なのは目の前の戦闘屋。

ベルトに付けた錠剤ケースを手取る。

「ソレハ？」

「……今からやられるお前には関係ないだろ」

「……ッ!」

戦闘屋が床を蹴る。

「ゴクッ」

ケースから青色の錠剤を取り出し、飲み込んだ。

「シネエ!!」

鉄の如き拳が眼前に迫る。

——ドクン

自分の心臓の鼓動がハッキリと聞こえだす。

——ドクン

近づく剛腕が、遅く見え始めた。

「ッ!!!」

「ガッ!?!」

刹那、奴の顔面へと蹴りが刺さる。

「オオッ!!!」

巨体が宙に浮き、壁へ激突。

音と衝撃で部屋が揺れた。

「ナ、ナニ、ガ……」

(チツ、流星にかけてえ)

とはいえ、チンタラやってる暇はない。

「Anti^A Poison^P Cycle^C。モード、Caul^フt^ルi^イo^ンn」

「キサマア!!」

「来いよ」

思う存分、やらせてもらう。

第10話 毒を殺す毒

今の俺が武偵としてやっていける実力があるのは、ある2人の人物のお陰だ。

1人は、あの人。

銃の使い方やナイフの使い方。涼しい顔をして、あらゆる戦闘技術を教えてくれた今の依頼主。

もう1人は、師匠と俺は呼んでいた。

師匠の知識は豊富という言葉で表せないほどで、その中で特に詳しくかったのが、毒だった。

『あなたの体内にある特殊な成分。調べたら面白いことがわかったわ』

『勿体ぶらずに教えろって? ……毒よ。それも、とても希少な毒』

『初めて見たわこんな毒。まさか、…毒を殺す毒! なんてものがあったなんてね』

『解毒とは違って毒素を食べるの。欠片も残さずに、ね。私が知る限りの毒物全てが、効かないのことが証明されたわ』

『つまり、今この世にある毒であなたが死ぬことはまずない』

『——ただし』



『フウン!!?』

空気を裂きながら、拳が唸りをあげて迫る。

それを、手で流して躲す。

「グオっ!??!」

懐に入り込んだところで、膝蹴りを打ち込む。

「立てよ」

「グウ……!」

跪いたところで、まだ余力があるのはわかっている。

すぐさま立ち上がり腕を振るってきた。

「——っ!」

「ガハアツ!??!」

間髪入れずに、蹴打を叩き込む。

「鉄」という異名の如き攻撃も当たらなければ意味はない。

繰り返される猛攻を「流し」ですり抜ける。

「ナゼダ……! ナゼ、アタラナイ!」

相手の攻撃を受け入れつつ躲す。

それが、流^{なが}し。

蹴りが主体のスタイルを活かすべく、空いた両手を防御に使う。

今は左腕が上がらないから、右手だけだが。

「ゴッ、ハアツ……!」

右手を奴の攻撃に合わせ、流して蹴りを叩き込む。

『ただし、体内にある毒を1度外部に取り出すと変異して同物質を誤認して敵とみなす。つまり、互いに殺し合うことになるの』

「何してやがる!??! さっさとソイツを——」

腰に刺したナイフを投合。

ヒュルヒュルと回転し、金髪の持つ銃へと当たる。

「ツてえ!」

「兄貴!」

狼狽している間に、床に落ちたハイキヤパを拾う。

すぐに構え、手下の持つ銃を狙い撃つ。

「や、野郎……!」

(あとは……)

『その際に、身体を活性化させる成分が過剰に生成されるわ。これにより超人的なパワーが一時的に得られるけど……』

何発かを発砲し間宮の縄を解き、転がっている刀を足で蹴る。

「間宮！ 佐々木！」

「うん！」

「はい！」

手足をベッドに拘束をされていた間宮と刀を拾い上げた志乃が立ち上がる。

「ここまでです！」

「大人しくして！」

今度こそ、誘拐犯を確保。

俺が投げ渡した手錠で拘束した。

『リスクとして、死ぬ危険はあるわ。毒だもの。取り込む量が多ければ多いほど強靱な肉体になるけれど、長くは続かないし死ぬ可能性が高くなるだけね』

「終わりにしようぜ、アイアン鉄」

「クソガアアアアツ!!?」

『しょうがないから、ある程度コントロールできる薬を作っただけ。……ああ、感染の心配はないから安心なさい。これまで通り、わたしのオモチャよ』

(誰がオモチャだったっの)

ふと、師匠とのやり取りを思い出す。

あの人には最後までいいように転がされていた。

仕返しとして内緒で武偵高に入学したが、今はどうしてるのだろうか。

「ツブレロォ！」

鉄拳のラツシュ。

1発でも食らえば、致命傷。

両手が使えるなら流して避けられるかもしれないが、生憎今は無理だ。

(馬鹿正直に付き合うつもりはない)

連発された拳を見切り、腕が伸びきった所を蹴り上げた。

「シマツ——」

乗せていた力ごと上に弾かれたため、奴の身体が僅かに後ろへのけ反る。

懐がガラ空きだ。

脚力で跳ね、空中で身体を1回転。

そのまま右脚を振り下ろす。

「お返しだ」

鈍い音を立て、巨体が前のめりに倒れ込む。

「バ、カナ……」

ドスンと崩れ落ち、同時に意識も落ちて気絶した。

殺してはいない。

今度こそ、誘拐事件は幕を閉じた。



「いててて……」

場所は変わり、病院にて。

負傷した左腕を診てもらうために足を運んだ。

「りっ君ー」

検査と診察を済ませロビーに向かうと、付き添い人の志乃が駆け寄ってくる。

「具合はどうでした？」

「幸い、骨折もヒビもないってさ。油断せずに冷やしなから、なるべく負荷を与えないように安静につて」

念のため三角巾で腕を吊り、湿布と小さな氷袋で冷やしている。
しばらくは不自由な生活になるな。

「みんなは?」

「ライカは島さんと一緒に。あかりちゃんも事件のまとめをしてくれてます」

「……間宮になんかおごらないとな」

間宮が書類整理とかできるのか不安だ。

頼りになる戦姉妹がいるから平気だと思うが。

「あの」

「ん?」

「あの時、飲んでた薬みたいなのは……」

そうだった。

A P Cに加え、体内の毒に関する話は話していなかった。

「そのうち話すよ」

「……わかり、ました」

口では言うものの、伺える表情は納得していない。

俺が色々と危ない橋を渡り、秘密にしていることがあるのは勘づいてるが、問い詰めることはしない。

したくても、できない。

(別に、俺はいつでも……)

彼女が本気で詰め寄ってくるなら、喜んで応えるのに。

……そうだ。

「志乃、デートしようか」

「へ?」

第11話 偶然ダブルデート

誘拐事件から数日経った今日。

宣言通り、俺と志乃はデートをしている。

ちなみに間宮は、島と火野の仲を取り持つべく別の用事。

「歌いすぎた」

「カラオケなんて初めて行きました」

「いいストレス発散になったでしょ」

カラオケを終え、ぶらぶらと街を歩く。

「ほら」

「……ん」

そつと左手を差し出すと、顔を赤らめながら握ってくれた。

まずは、それっぽいことをしないと。

セックスしてる時点で今さらだが。

「あ、リッ君。あのお店……」

「じゃあ、行ってみようか」

志乃が目にしたのは、如何にも女性人気がありそうなブランド服が並んだショッパ。

外から見たただけでもいいお店なのがよくわかる。

「前から来てみたかったんです。良ければコーディネートしてくれませんか？」

「いいけど……。上手くできるかなあ」

「選んでくれるだけで私は嬉しいですよ」

そう言って微笑む志乃と店の前まで行くと……。

「キンちゃん！ ほら、あのお店だよ！」

「ま、待て白雪。やっぱり女物の店は……」

『あ』

聞き覚えのある声。

俺達と反対方向からやってきたのは2人の先輩。

「白雪お姉さま！」

「志乃さん！」

1人は志乃の戦姉妹でもある星伽白雪先輩。
もう1人は――

「……藤」

「……どうも、遠山先輩」



「こういうお店はやっぱ肩身が狭くなりますね」

「全くだ」

偶然にも出会った俺達4人は店内に入り、期せずしてダブルデートになった。

今は志乃と星伽先輩が仲良くしてるところを、少し離れた所から遠山先輩と見守っている。

「こうして話すのは合同訓練以来ですね」

「……そうだな」

「すいません。デートのお邪魔を試してみたいで」

「あー……。それはこっちのセリフでもあるから気にすんな。白雪も楽しそうだしな」

戦闘実技も交えた合同訓練。

入学数日後に行われた抜き打ちテストは先輩達との合同で、事件を想定したシミュレーションだった。

まだ勝手がわからない1年を2年が適宜アドバイスしながら進め、その頃にはもう探偵科に移った遠山先輩と同じチームで行った。

「女嫌いじゃなかったんですか？」

「い、色々あってな」

「……一緒に寝たとか？」

「ゴフツッ！」

凶星を突かれて先輩が嘔き出した。

いや、隠しても知ってるし。仕組んだの俺だし。

「先輩もやっぱ男だったってことですね」

「お、お前なあ……」

「最近は神崎先輩も狙ってるんですか？」
「なわけないだろ！ だいたい、付きまとわれて迷惑してるんだよ。お前ならその辺のこともう知ってるだろ？」
「勿論。……なんなら先輩の知らない事も知ってます」
「教えてくれる気は——」
「ないですねえ」
ノータイムで答えを返す。
「……ほんと、お前はよくわからん」
「わかるうとしない方がいいかと」
先輩は深く溜息をついた。



「じゃあ、俺達はこれで」
「お姉さま。それに、遠山先輩。ありがとうございました」
「こちらこそ。また、学校でね」
「はい！」
「気を付けろよ」
（……そうだ）
店を出て別れようとしたところで1つ、思いついた。
「遠山先輩」
「ん？」
コソコソと男2人でやり取りをする。
ポケットに忍ばせておいたソレを手渡した。
「おまっ、これ」
ソレは、3つのコンドーム。
「あげます。必要でしょ？」
「い、いや、別に……」
「星伽先輩、絶対期待してますよ？」
「ッ！」
チラリと、後ろを見る。

『?』

ハテナマークを浮かべ、小首を傾げる女性方。

先程の店で、遠山先輩が選んだ服に身を包んだ星伽先輩。

その姿は無自覚で色気を振りまき、通り過ぎる男性女性が目を向けてしまうほど。

……志乃も負けてないけどな！

俺の選んだ服着てくれてるし！

「それに、先輩も結構溜まってますよね。我慢しながら神崎先輩と一緒にいますもんね」

俺が仕組んだ夜以来、先輩が性欲を発散できていないのは知っている。

神崎先輩が来て以来は自慰だつてできないしな。

「足りないと思ったら、自分で買ってくださいね」

「いらん気遣いを……」

「ヒステリアモードがあつても、生物としての欲求はちゃんとあるんですよ?」

「——お前!」

「行くよ、志乃」

手を取り、歩き出す。

ゴムはまだカバンにあるから気にしてない。

「い、いいんですか? 何か話してたんじゃ……」

「いいのいいの。もう済んだから」

また手を繋いでどうするかを考える。

「次はどこに行こうか」

「そうですね……」

その後、日が暮れるまで街を巡って食事をして——

「お風呂、入っておいで」

「……うん」

明日は休日。

今から気が済むまで、志乃と交わる。

第12話 交じり合つて、一歩進んで ☆

「んん♡んっ♡」

ラブホテルのベッドで、俺達はまぐわい始めた。

「あっ♡そこ、っ♡一緒に、いじっちゃ♡」

頭側へ寄りかかる俺に背中を預け、愛撫をされる志乃。

左手は胸をまさぐり、右手は秘部から丁寧に刺激を与える。

「はあっ♡乳首い♡クリクリだめえ♡うっ♡う♡」

たぶたぶと果実を揺らして柔らかさを堪能した後、硬く起立した蕾に触れた。

「りっ君……♡ふうっ♡」

身体は火照り、肌が淡く桃色に染まる。

吐息と共に名前を呼ばれるだけで興奮が増してゆく。

「気持ちいい?」

「う、うん♡りっ君にっ♡触られるの、気持ちいい♡」

「なら良かった。……んっ」

首スジに顔を埋め、キスを落とす。

「あっ♡あっ♡跡、ついちやうう♡」

香水を付けてるわけでもないのに、甘い香りが鼻腔をくすぐる。

「……ふぁ」

嗅覚と触覚から女体の魅力を感じる。

「ひうっ♡うっ♡ああっ♡」

「ごこも、勃ってる」

乳首に次いで、硬くなったクリトリスが視界に入る。

膣に入れていた指を抜いて、そっと人差し指で触れた。

「っく♡」

指の腹でトントンと優しく。

「あっ♡あっ♡」

「志乃」

「だめっ♡だめえ♡イツちやう♡」

「いっよ」

鎖骨に吸い付き、囁く。

震える身体が快感を逃がそうとよじりだした。
触れていた指で、摘む。

「~~~~~っ♡りっ、くうん♡んちゅ♡」

左手を添えてコチラを向かせた。

猫撫で声で名前を呼んだ口を唇で塞ぐ。

「んん♡んっ♡んっ♡」

逃げ場はない。

彼女が達する時は近い。

「ちゅっ♡んむ♡んーっ♡んんーっ♡」

「……ぶはっ」

「イツ♡♡♡あ、くっ♡♡♡ううっ♡♡♡」

キスをやめて息をついた直後、志乃は声を上げて絶頂した。

「あひ♡止まらなっ♡いやっ♡」

股座から吹く潮。

背中強く反るようにして浸っている。

「きゅっ♡は、あ、~~~~~っ♡」

「志乃はえっちだなあ」

「あっ♡」

「でも、そこが可愛い」

「~~~~~っ♡♡」

震えが小さくなってゆく。

小さく、浅い呼吸を繰り返しながらクタリと寄りかかる肢体。

「んくっ♡……はあ♡」

瑞々しい巨乳を揉むと艶かしく喘ぐ。

肌に浮かぶ汗が、部屋のライトで光っている。

「りっ君……♡」

「ん？」

「……おちんちん、舐めさせて♡」

「んじゅっ♡ぢゆる♡」

「っ」

「ぺろっ♡れろお♡はあむ♡」

仰向けになった俺の股間に顔を埋める志乃。

そこから響くのは、フェラチオによる快楽音。

「んっ♡んんっ♡」

夢中になりながら竿を啜える。

清楚な見た目に似合わない行いは、いつ見てもギャップが凄い。

「ぢゅっぽ♡ぐぽっ♡ぐぽっ♡ん、むううう……♡」

「う、はあ……っ！」

小さくストロークしたと思ったら、喉奥まで飲み込んだ。

口内から浸食する熱が、勃起した肉棒の温度をさらに上げる。

「っ♡じゅっぽお……♡んっ♡んっ♡ちゅびっ♡ちゅっば♡

はあ♡」

ゆっくりと口から抜き出し、亀頭部分だけをまた啜える。

舌を絡め唾液をコーティングし、愛おしそうな顔をしている。

「入れて、いい？♡」

「いいよ。でも、その前に——」

枕元に置かれたゴムを手に取り、見せる。

「コレ、今回は使いたくないんだ」

「……え」

志乃の表情が固まる。

そりゃあ、そうゆう反応になるよな。

「やっぱり嫌か？」

「い、嫌じゃないです！むしろ、その、嬉しいですけど……」

静かに俯き、言葉が尻すぼみになってゆく。

「俺は本気だ」

「っ」

「もう何処にも行かない。ずっと一緒だ」

「……他の方はどうするんですか？」

「うっ」

痛いところを突かれた。

やっぱ知っていたか……。

「もう、仕方ないですね」

「おっと」

ふわりと上から抱きつかれた。

そのまま、何かを確かめるようなキスをする。

「んっ♡……っは♡」

「……誓いキスってやつ？」

「そんなところです」

首に腕をまわされ、胸同士が触れ合う。

そのままスリスリと互いの性器を擦り付ける。

「5人までなら許しちゃいます」

「5股とか、男として最低すぎるだろう」

「ちゃんと責任を取ってくれるなら私はいいと思いますよ。それでも

……」

身体を離し、起き上がる。

膝立ちになった彼女は、己の膣口に起立した逸物を当てた。

「りっ君の隣は、私のものです。んっ♡」

肉壁を掻き分け、奥まで入り込む。

「ふっ♡あ、ああ♡ふふっ♡」

志乃が、うっとりしながらお腹に手を当て笑う。

その笑みは見たことない種類の笑みだった。

「すごい、です♡りっ君の、が♡あんっ♡」

女としての色気が増したように思える。

「んっ♡ほんと、に♡いいんですか？♡」

「っ、何が」

「だって♡私、っ♡りっ君に♡酷いこと、をっ♡」

両手を繋ぎ指を絡めながら、結合を続ける。

「……そんなの、もういいんだよ」

「でもっ♡でもお♡」

彼女の瞳から涙が溢れる。

その涙に含まれる感情は、きつと様々な想いが込められているのだらう。

「志乃がどう思っついていようと、俺にとっては、もうどうでもいいんだ」
我ながら酷い言い草だ。

「そんなことよりも、今は、お前とずっとこうしていたい」

「くっくっ♡ひど、いつ♡私がつ♡どんなに、悩んだと思っつて♡」

「ごめんな。でも、そんなことよりも、俺は志乃と一緒にがいい」

「ずっ♡ずる、いつ♡ずるいよお♡」

上下に跳ねる志乃に合わせて腰を動かす。

ぶるんぶるんと揺れる胸の動きが興奮材になり、チンコの硬さが増す。

「嫌、か？」

「っば♡ばかあ♡りっ君のばかあ♡」

「うっ」

中の締め付けが強くなる。

生だからか、感じたことのない彼女からの刺激は俺の余裕をガリガリ削る。

「ずつと♡ずつと」一緒にいる♡もう、離れないっ♡」

「……ああ」

「きてっ♡きてえ♡りっ君のお、全部私にい♡」

挿挿が加速する。

結合部からは酷く濁った音と隠臭が。

「出る………！」

「あっ♡」

昇ってきた精子が飛び出す。

「きっ♡ああ、あつっ♡んやっ♡」

怒涛の勢いが志乃の子宮を揺らし、満たす。

「~~~~~♡♡♡はうう♡♡♡」

脚がピクピク震え、動けないようだ。

恐らく、また絶頂したんだろう。

「まだ出るから」

「ふっ♡ふえ♡んきゅっ♡」

手を解き、細いクビレへと両手を添える。

「あっ♡あっ♡お腹っ♡いっぱいなのになっ♡」

「っ！」

「ひっ♡あ、ああ♡あ、~~~~~っ♡」

尿道に残った分を捻り出す。

「……はあ♡……はあ♡……」

「んっ。……はあ」

入りきらなかったザーメンが隙間から漏れ出す。

結構な量を出したらしい。

「ふっ♡……ふっ♡……。後で、ピル飲みますね」

「……ごめん」

「……ふっ♡」

ぬるりと抜け落ち、白い液体が膣から垂れてゆく。

「生って、凄いですね♡りっ君のあったかいのが気持ちいいです♡」

「……志乃」

「あっ♡」

今度は彼女を仰向けに押し倒す。

「——きて♡」

そこから先は何があったのか覚えていない。

目が覚めたら互いの汗と愛液でベトベトで、抱きしめ合って寝てい

た。

寝息を立てる志乃を見た後、時計を見ると日付は変わっていて

……。

どうやら昨日の夜から丸一日ぶっ通しでやりまくったようだった。

第2章 平和、時々、面倒事 第13話 コンビで任務

「死ねやあー！」

スキンヘッドの男がメリケンサックを装備して拳を振るう。

(危ねえ、なっと！)

「ガツ!?？」

流したら手が血だらけになるので身を翻して躲し、カウンターの要領で顔面に蹴りを入れる。

呻き声をあげながら気絶した。

「ヤロオー！」

「やつちまえー！」

一息つく間も無く、人相の悪い奴らの何人かがコチラに銃口を向ける。

発砲を防ぐためすぐにホルスターからハイキャパを抜き、持ち手を撃ち抜く。

「つでえ!?？」

「こ、このガキがあー！」

「ッ！」

一瞬の隙も見逃さない。

1人に蹴りを顎に掠めると倒れ、もう1人は背後から首を外れないよう適度に締め上げ失神。

余裕ができたところで、通信が入った。

『こちら中空知。状況の報告をお願いします』

「丁度2階の制圧が完了しました。今のところここまで騒がしくしてないから増援とかなわないと思いますけど、どうでしょう?」

タチの悪いヤクザを掃討するのが今回の依頼。

戦徒コンビで受けることで互いに応じた単位を貰えるため、美咲先輩を誘ってみた所二つ返事で了承してもらえた。

『……映像と音を確認しました。特に不審な事はありません』

「了解です。コッチも異常はないので、このままナビゲートお願いします」

ビルに潜入し制圧するのが俺の役目で、予め仕掛けた盗聴機とハッキングした監視カメラ等を使い通信機でオペレートするのが美咲先輩の役目。

先輩は今、少し離れた場所に留めてあるワゴン車の中で指示を出している。

一緒にこなすのは初めてではないが、先輩からの指示や確認は無駄がないから非常にやり易い。

「さてと……」

リロードを終え、錠剤ケースから青色の薬を1つ取り出す。

事前に確認した資料によれば、ビルは五階建てまだまだ組員はい

る。こっからは人数も増えて厄介になるだろう。

「気を引き締めないとな」

薬を飲み込む。

心音の高鳴りが1つ、内側から響いた。

「オペレートの続行、お願いします」

『了解です』



「はあく、お疲れ様でした」

「お、お、お疲れ、様……」

「それじゃあ、かんぱーい！」

「か、乾杯……」

任務を無事に終えた俺達は2人でちよつとした打ち上げを始めた。中々危険な依頼だったので、後の疲労を取るためにホテルを予約し今はその一室。

「ゴクツ、ゴクツ……プハー！ ああく、仕事終わりの一杯は格別です」

「ま、またお酒飲んで……」

「心配しなくても、飲み過ぎには気をつけてますんで大丈夫ですよ」

「そそそ、そうゆう事じゃない、のにい……」

美咲先輩がジューズなのに対し、俺はチューハイ。

未成年が飲んではいけないと言うが、精神的にはもう成人越えをしてると思ってるので気にしていない。

「バレなきやいいんですよ。バレなきや」

「ぶ、武偵が何てことを……」

「まあまあ、それはもう置いて。食べましょうよ」

広い部屋の窓側のスペースで、テーブルを挟んで腰掛けている。

机の上には注文したピザやつまみが並んでいた。

「い、いただき、ます」

「いただきます」

ゆったりとした食事をしながら、談笑をする。

「それにしても、今回の件即答してもらえとは思ってなかったです」

「そ、そうなの？」

「はい。面倒な内容だし、美咲先輩が単位欲しさに食いつくなんて全く思ってませんし」

「り、律紀君と一緒になら、ぜぜ、全然大丈夫だよ」

「……そう、ですか」

いつも通り慌てふためきながら言葉を紡ぐ先輩。

「何か隠してます？」

「ふえっ!?? な、なな何も、隠してなんか、いないよ?」

「……………」

「……………」

ジツと目を合わせると観念したようで、ポツリポツリと話し始めた。

「そんな、隠すほどのことでもないんだけど……。あの、ね?」

「はい」

「ちや、ちゃんと単位を取って卒業して、律紀君と一緒に働きたい……なんて」

顔には出さないようにしたが、内心では驚いた。

消極的な先輩の口からそんな言葉が聞けるだなんて予想できないし、ましてや、原作では3年進級時に退学になり流れるまま遠山先輩と会社を立ち上げるといふ形になっていた。

志乃と同じく美咲先輩も今、俺という存在で変わろうとしている。

「ダメ……かな?」

「いや、そんなことないです。むしろ嬉しいです」

これは本心だ。

身体を重ねる前から何となく好意は感じていたがここまでとは……。

「わ、私以外にも女の子がいるのはし、知ってる。それでも、すすす好きだから。いい、一緒がいいなって」

「美咲さん……」

志乃との仲を知っているのに、そこまで好いてくれるのか。

眼鏡の奥の瞳は微かに潤んでいる。

この決心は、絶対に軽い気持ちで決めたものではない。

なら――

「こちらこそ、これからよろしくお願いします」

「……へ?」

一拍おいて、悲しげな表情が一転。

何を言われたのかわからないような顔になった。

「ですからその、こんなクズヤローで良ければよろしくお願いします」

「ほ、ほほほホントに?」

「ええ」

「う、嘘じゃない、よね?」

「誓って嘘なんかじゃないです。とゆうか、セックスしてから絶対に責任取るって決めてましたから」

「そう、なんだ……。エへへ……」

食事を終え、ベッドでゴロゴロと2人して横になる。

横向きで、さながらマーキングのようにスリスリと身体を擦り付けてくる先輩。

「り、律紀、君」

「何ですか？」

「そ、その、呼んでみただけ……」

「……………」

そんな可愛いことするのは卑怯でしょ。

俺はガバツと起き上がると同時、服を脱ぎ出す。

「ええ!?? なななな何を!??」

「我慢できなくて」

てか、俺の裸なんて今更な気が……。

手で顔を覆ってるけど、指の間からバツチリ覗いてるし。

「お風呂入りましょうか」

「い、一緒にとかわわないよね?」

「一緒に入るに決まってるじゃないですか」

パンツ1枚になり、美咲さんに近づく。

「ほら、早く脱いで下さい」

「ああっス、スカート返してえ……! 眼鏡っ。んっ♡あんっ♡」

手早くひん剥きお姫様抱っこで抱え、俺達はバスルームへと向かった。

第14話 水も滴る中空知 ☆

2人で入っても余裕の広さを持つバスルーム。
いやいやと身体をよじる美咲さんを逃がさぬよう、泡まみれの手で触れる。

「あっ♡んやあ♡」

手触りの良い肌がヌルヌルと滑る。

「っ♡揉む、のっ♡だめえ♡」

「だめと言われても無理です」

互いに立ったまま密着し、後ろから乳房を揉みしだく。

「うっ♡んんっ♡ふああ♡」

豊満な胸が形を変える。

普段の沈むような柔らかさに加え、泡による感触が興奮を逆立ててくれる。

稀に触れる桜色のソレは既に固く起立していた。

「さきっ……ぽっ♡うくっ♡んはあ♡」

「美咲さん」

「っ、つまんじやつ♡ああ、だめっ♡ひっぱら、ないでえ……♡」

胸を弄ばれて悶える先輩。

一応、身体を洗うという行為も兼ねているのだが……。

「ちゃんと洗わないと」

「そ、そこはっ♡ひっ♡」

我慢という2文字はとっくに消え去っている為、本能に従って動くのみ。

「いっ♡ああ、ゆびっ♡なかつ♡」

左手を胸に触れたまま、右の中指を膣内に差し込む。

「あっっ。とろとろですね」

「い、言わないでえ……♡」

割れ目からの水気が増してゆく。

シャワーの水滴やお湯ではないのは、誰の目から見ても明らかだ。

「う、ふっ♡かきませちゃっ♡」

ピクピクと身体が跳ね、体重をコチラに預けてくる。段々と脚に力が入らなくなったきたのだろう。

「あ、あう♡律紀、くんっ♡……っ♡」

ちゅぷりと指を引き出す。

爪の先から根元まで愛液が絡みつき、雌の臭いを漂わせている。

「あっ♡またっ、おっぱい……っ♡」

下からすくい上げるように揉むと、手の平に収まらない部分が零れ落ちる。

重力に従って僅かに下を向く胸を見れば、その重さと大きさがありありとわかる。

(……うん。やっぱりそうかも)

「んうん♡んっ♡はっ、はあああ……っ♡」

乳首を転がし指を埋没させ興奮しながら触れている中で、俺は1つの確信を得ていた。

「美咲さん。もしかして何ですけど……」

「なっ♡何、か、なあ♡」

「胸、大きくなりました?」

ピタリと、美咲さんの動きが止まる。

「え、えつと、その、あの……」

「どうなんですか?」

「ち、違う、よ?」

「ふーん……」

「……あっ♡やめっ♡」

嘘とわかりやすい否定の言葉。

一層激しく手を動かし、円を描くように捏ねたり、乳首を押し潰したりする。

「~~~~っ♡いつ♡んあ♡」

「前よりも大きい丸わかりですよ」

とゆうか、元々大きかったのにまだ成長するのかと内心驚いた。

確かにまだ成長期と言える時期かもしれないが……。

ヒクヒクと蠢く性器同士が触れ合わせ、擦る。

少しでも腰をズラせば容易に入るのが見て取れる。

「イ、イツたば、ぼつかで♡ひううっ♡」

何と言われようとコチラの分身は限界なため、容赦なく亀頭を潜りこませた。

「~~~~♡あっ♡ふっ♡ふううう♡」

ゆっくり、ゆっくりと先から幹が埋まってゆき……。

「うっ♡」

膣が根本までズツポリと啜えこみ、最奥の子宮を突いた。

「な、まっ♡す、すごいよお♡」

ゴムを使わないセックスを先輩とするのはこれが初めてだ。

本当はスル前に聞くべきだったのかもしれないが、元々そのつもりでバスルームに持ち込まずに入ったし、それを先輩も察していた。

(入る前から股間ガン見だったもんなあ……)

「んっ♡んあっ♡ふか、いつ♡あっ♡」

美咲さんの脇の下から腕を通し、固定する。

「はっ♡はあっ♡お、おちんちんっ♡おくっ♡あ、ふっ♡」

ピストンでお尻の肉が歪み、胸がぷるんと弾む。

揺れる胸を手で抑えて、突くたびに感じる臀部の柔らかさを股間全体で感じる。

触覚に視覚、聴覚といった五感に属する部分が官能的に染められる。

「んう♡う、んっ♡律、紀くんっ♡すきっ♡も、もっとお♡」

「っ！は、ああー！」

「~~~~♡っ♡」

隙間無く子宮口に押し付けた陰茎をさらに押し込む。

情欲が増してゆき、理性というストッパーは役目を完全に忘れた。

「~~~~♡ほっ♡ほっ、あ、っ♡こ、これえ♡」

白い放流がすぐそこまで迫っている。

限界を感じ取り、次に取った行動は少しでも長く彼女の肢体を堪能することだった。

「ひっ♡んっ♡はげしっ♡イクっ♡」

「ハアッ！ ハアッ！」

「は、やっ♡あ、ああ♡ーっ♡イツ♡」

小刻みに早く挿し、オーガズムを加速させる。

息を荒げ獣のように交わる。

「イクっ♡あゝっ♡律紀、くんゝっ♡」

喉が枯れそうだ。

「い、いい♡一緒につ♡い、いこっ♡」

「美咲、さん…！」

「きてえ♡なかにっ♡だし、てっ♡」

「あゝあゝ！」

「っ♡」

不意にピタリと動きが止まり、その時はきた。

「いっぱい♡ちよう、だい…♡」

射精が始まり子宮を満たしてゆく。

瞬く間に注がれた精子は結合部から溢れ、浴室の床を白く汚す。

「…あ、はあゝっ♡とくとくって、んっ♡んっ♡」

睾丸に詰まった子種を余すことなく送る。

生殖本能丸出しの姿で交わる様は、端から見れば酷く滑稽かもしれない。

ない。

（美咲さん、抱き心地、凄い…）

「はあっ♡はあっ♡…あゝっ♡…はあ♡」

思考も可笑しな方向へ飛び始め、そこからはもう気の済むまでシマ

くった。

当然、仲良くのぼせたの言うまでもない。

第15話 カルテット

美咲さんとの合同任務が終わり、何事もなく武偵生活を送っていたある日。

教務科前の掲示板へと1年は集まっていた。

「カルテット律紀は4対4に出ないのか」

「クエスト行つてたからな。そんなテストあるの知らなかったし」

本音を言えば原作知識で知っていたが、知らないように装った。

とはいえ単位が足りなくなってしまう為、教員からフオローされた。

「単位は大丈夫なんですか？」

「後日何かしらのことはするらしい」

事前に伝えるのを忘れていたということで、同様の実践テストをするとのこと。

ちなみに、カルテットがあると教えてくれたのは美咲さんである。

この間の合同任務。実は盗聴器などの準備の為、先に俺が単独で進め途中で合流をした。

班決め申請率が低いから急ぎ申請するようにと、伝令するよう教務科から直々に頼まれたらしい。

『す、すす凄く、緊張したよお……』

涙目で訴える姿がとても可愛くて何よりだった。

「イタッ」

「……………」

唐突に脇腹をつねられた。

見れば、志乃がジト目と共に頬を僅かに膨らましている。

「よっぽど、戦姉妹さんとのクエストが楽しかったみたいですね」

「え、えーつと……。顔に出てた？」

「ええ。私はわかりましたよ？」

「これは……………後でかまってやらないといけないか。

「みんなー！ あたし達の班あつたよー！」

「お、どれどれー？」

「お姉様、あそこですよ！」

「ほ、ほら行こう」

「……もう」

仕方なくといった様子で連れだって対戦相手を確認する。

掲示板を眺めてみると、そこには原作通りの対戦カードがあった。

「えっと、あたし達の相手は……高千穂班？」

「高千穂麗、強襲科のAランクだぜ。確か……」

「C組の組長ですね」

「CッVチRが勧誘したこともある人で、男女問わずM属性の方々には人気のある方ですよ」

「……ねえ、志乃ちゃん」

「何でしょう？」

「M属性って何？」

志乃の表情が固まった。

「え、えーっとですね……」

マゾヒスト何て言ってもわからないだろうし、純粋な間宮に事細かく教えるのは気が引ける。

現に、火野と島は我関せずといった感じだし。

「志乃ちゃん、教えて？」

「うっ！ ううっ……！」

潤んだ瞳で上目遣いの懇願。

実にあざといが、本人は別に意識してやってはいない。

「ん？」

(り、りっ君助けてください！)

オロオロと狼狽しながら視線で求められた。

「……うーん。

「あのな、間宮」

「うん」

「M属性ってのは守りの略称だな。つまり、防御を主体に戦う武偵のことだ」

「そうなんだ！」

(そうじゃない！)

脳内総ツツコミを受信したが、仕方ないだろう。

このピュアピュアな少女に変な知識を覚えて欲しくはないし。

そんなくだらないことをしていると……

「湯湯、夜夜。笑え」

『オーホッホッホッホ!!』

高笑いと共に金髪を携えた女生徒が瓜二つの双子を連れてやってきた。

(出たよ)

いかにも高飛車で気が強そうな彼女こそ間宮達の相手、高千穂麗。くつついてる双子は、愛沢姉妹。

姉妹はそれぞれカチューシャをつけており、ゆと書いてある方が愛沢湯湯。やの方が愛沢夜夜である。

「湯湯、夜夜。やめッ」

合図1つで愛沢姉妹の笑いが止まる。

チラリとこちらを値踏みするような視線に変わった。

「ダメそうな対戦相手ね。お父様の武偵校への寄付が効いたのかしら、インターンまでいるし?」

折り畳んだ扇子で島の顎を持ち上げる。

「しょうがねえだろ戦姉妹なんだ」

それが気に入らなかつたのだろう。

火野が透かさず間に入った。

「まあ、CVRの戦姉妹だなんて何に使うんだか」

「ッ! 闘りてえんなら——そのお顔にドロ塗ってやる!」

高千穂の顔面目掛け火野が右拳を振るうが、第三者の介入により止められた。

「お前! ふ、風魔陽菜!」

「ライカ殿。お忍びなされ」

右手を後ろで捻られて拘束。

頬へはクナイを当てている。

「使えそうだったから雇ったのよ。カルテットまでの契約でね」

風魔は同学年の諜報科ランクBで、正真正銘本物のくのいち。あの高名な風魔小太郎の子孫との噂で、遠山先輩の戦姉妹だ。

「チツ、武偵は金で動くからな」

「そういうことよ。……で、誰の顔に何ですって？」

「お姉様！」

「ライカ！ えっ？」

間宮と島が助けに入ろうとするも、愛沢姉妹が間宮を後ろから拘束した。

それぞれが腕を抱えている為、容易には抜け出せない。

「は、放して！」

「惨めね。カルテットの班は戦略やバランスを考えて作るべきよ」

口元を扇子で隠し、高千穂は悪態をつく。

続けて目を向けたのは――

「佐々木志乃。お父上は武装検事」

――志乃だった。

「……それが、何だっというんですか」

一触即発。

すぐさま洋風刀の柄に手を添え、警戒態勢を取る。

「私のお父様とは裁判所で犬猿の仲とか」

「……思い出しました。武装弁護士の高千穂一族」

「フン」

「鳥取出身」

ズルリ、とまるでコントのように足を滑らした。

「と、鳥取は関係ないっちゃ！」

（そっぴやそうだったな）

「……オホン。まあ、それはいいわ」

開いていた扇子を再び閉じ、眼光が鋭くなる。

『ッ！』

雰囲気が一変。

さつきまでのおちやらかな様とは違う。

警戒していた志乃に島、動けない間宮に火野も感じたみたいだ。

「藤……律紀……ッ！」

ギリギリと歯を鳴らし、こちらを睨みつけてきた。

「相変わらずなんだな、お前」

「黙りなさい。ここであつたが百年目よ……！」

「……えつと、何か因縁が？」

隣の志乃が聞いてくる。

「俺的には因縁とか全くないんだけどな。入学したての頃やった試験で負かしただけ」

「忘れもしないわ！ このわたくしが、わけもわからないままモノの数秒でやられるなんて……！」

「対応できなかつたお前が悪いんだって」

あの時は先手を取るのが有利だと思つたから、軽く錯乱させて拘束しただけだ。

A P Cも使つてなかつたしな。

「黙らっしやい！ あの時の屈辱、今度こそ……つて」
「ん？」

「カルテットは4人よね。まさか……」

「ああ、俺は出ないぞ」

ポカーンと口を開けたまま固まる高千穂。

しばらくして……。

「な、何ですってえー?! どどど、どういふことよ?!」

「うっせえ、こつちの事情だ。出ないもんは出ないんだよ」

「ぐぬぬぬ……！」

何とも言えない表情をしていらっしやる。

それよりも、だ。

「つーか、いい加減間宮と火野を離せよ」

「フン！ 誰がお前の指示なんか——」

「なら、勝手にやる」

——カチャン、カチャン

『え』

まずは、愛沢姉妹を仲良く手錠で拘束。
互いの両手を2つの錠で繋いだ形だ。

『ええええええええ!!』

「大丈夫か間宮?」

「う、うん。ありがとう……」

「なにこれ!! いつの間にも!!」

「う、麗様!!」

(次だ)

素早く、風魔の元へと近づく。

「くっ!!」

気配を察したのか火野を解放し、クナイを構えて迎え撃とうとする。

対して、俺が取った行動は――

「フッ!!」

「ああッ!!」

携帯していたサバイバルナイフをクナイとぶつけ合わせ、わざとパ
リイを起こした。

クナイはあっけなく床に落ち、金属音を鳴らす。

「ふ、不覚……!!」

その間に、さっきまでの火野とは逆……つまり、風魔が後ろ手に拘
束されるハメになった。

「火野は怪我ないか?」

「お、おう。サンキューな」

「おのれえ!!」

ワナワナと身体を震わす高千穂。

恐らく、これは彼女にとって2度目の屈辱となるだろう。

「怒ってるよこ悪いが、自分の状況を見てみるよ」

「ッ!! い、いつの間にも!!」

気づいた時には既に遅く、高千穂を四方で囲むように間宮達4人が
構えていた。

「高千穂、今回お前の相手は俺じゃない。今お前を囲んでいる奴らだ」
間宮はマイクロUZIをいつでも撃てるように。

志乃は刀の柄に指を滑らせ。

火野はポキポキ指を鳴らし。

島は中国^{クンフ}武術の構え。

「俺の仲間を舐めるなよ……っつと」

一言忠告してから、風魔の拘束を解く。

落ちていたクナイをそつと手渡した。

「ほらよ」

「か、かたじけない」

「……だとしても、仲良しこよしで作ったチームなんかじゃわたくし

達に勝つのは無理よ」

「無理なんかじゃ、ない！」

「あかりさんの言う通りです！」

「勝負はやってみきやわかんねーだろー！」

「仲良しこよし、上等ですよ！」

互いに宣戦布告。

それと同時に、外野から声が掛けられた。

「こらー！ 教務科の前で何やってんの！」

声の主は体操服に身を包んだ神崎先輩だった。

「——それじゃ、本番をお楽しみに」

一瞥し、去ってゆく高千穂。

その後ろを愛沢姉妹と風魔が追いかけていった。

(あ、手錠解いてやるの忘れた)

そんなこんなで、カルテットに向けての特訓が始まる。

第16話 特訓と先輩指導

高千穂班とのいざこざから次の日。

武偵校の合宿施設は全て高千穂が借り占めている為、志乃の家……佐々木家で特訓をすることに。

「じゃあ、私は帰るね。夜更かしはダメだからね？」

「わかってるよー」

そんな何気ないやり取りをしているのは苗字が間宮の2人。

片方は妹である間宮 ののか。

今日から土日も入れて3日間泊まりでの特訓。

泊まり込みということで姉が心配だったらしく、視察と荷物チェックも兼ねて顔を見せに来たらしい。

「それじゃあ、私はこれで」

「ののかさん、お気をつけてお帰り下さいですのー！」

「また今度遊ぼうな！」

「はい！ お姉ちゃんのこと、よろしくお願いします！」

礼儀正しく挨拶し、去っていった。

「凄くいい子でしたね」

「実は間宮の方が妹だったりして」

「ひどい!!」

佐々木家は広い。

志乃の父親は武装検事で資産家でもあるため裕福だ。双子のメイドがいたりなど一般の家庭ではまず見られない。

「とりあえずルールの把握からしましょうか？」

「麒麟はバッチリ把握済みですの」

「アタシはー……何となくしか知らないな。あかりは？」

「毒の一撃は初めて聞いたよ」

「まずはおさらいだな。志乃、オーデイオルームでいいか？」

「はい」

最初にやる事を決め、廊下を歩く。

壁には高そうな絵や花が飾られている。

「律樹は志乃の家って来たことあるのか？」

「まあ、な」

「お2人は幼馴染とお伺いしましたけど、どれくらい長いんですの？」
「ッ」

隣を歩く志乃が息を飲んだ。

口元がキュツと締められている。

「……初めて会ったのは5歳くらいの頃だよな？」

「え、ええ。そうですね……」

「ふわあく。だから2人とも仲良しなんだね！」

「……そうだな」

(10年会ってなかったけど)

何て言えるはずもなく、かといって表情に出せば探られそうだったので普段通りを装った。

そうして、場所は変わってオーディオルーム。

眼鏡を掛け教鞭を取った志乃が、スクリーンを使って解説を始める。

「教務科が定めた私達の競技は… 毒の一撃… です。間宮班・高千穂班はそれぞれハチ・クモの描かれた攻撃フラッグを持ちます」

教え方が上手い。

もしかしたら先生とか向いてるのかも。

(女教師の志乃……ありだな)

「双方が守るべきフラッグがあり、それには目が描かれています。これを誰かの攻撃フラッグでタッチしたチームの勝ちです」

「目を毒虫に刺されたら負けって意味だね？」

「そうです」

「アタシ達はハチかあ……」

「うひい！ ハチは嫌いなんですの！」

「実際に蜂を使うわけじゃないんだからそこまでビビらんでも……」
「気分の問題ですよ！」

フラッグの解説が会場について切り替わる。

大まかな地図がスクリーンへ映し出された。

「試験場は武偵高第1区全体で区内にある物は何を使ってもオーケー。間宮班は南端、高千穂班は北端からスタートします。基本ルルは以上です」

説明は終わった。

しかし、それにしても……

「シンプルだねえ」

「だな」

「……でも、隠匿・強襲・逃げ足・チームワーク——色んな能力が試されますわ」

チームワークは神崎先輩からお墨付きを貰えているくらいだから、それをどう生かすかかな。

「さっすがりんりん！」

全員で唸り始めた直後、メイドに案内され入ってきたのは金髪のツーサイドアップを携えた美少女。

「私の元教え子。できる子だよ」

「理子お姉様！」

探偵科ランクA。原作ヒロインの1人、峰^{みね}理子^{りこ}先輩だった。



「フツ！」

蹴りが虚空を彷徨う。

架空の敵を想定したイメージトレーニング。

他のみんなが峰先輩の指導を受ける中、俺は広い玄関前にて1人で鍛練していた。

志乃は双子との戦闘に備え2対1を。火野は島を相手に目隠しで防御と持久力を。間宮は……乗馬マシンで揺れている。

(端から見れば意味わかんないだろうなあ)

多分、いや、十中八九特訓を盗み見ている高千穂は笑っているだろう。

馬鹿にしている光景が自分へのトドメになるのも知らずに。

「りつくん」

書き慣れた愛称を掛けられ振り向くと、飲み物を携えた志乃が立っていた。

「お疲れ様です。良ければ一休みしませんか？」

「……」

「りつくん？」

首を傾げる志乃。

だが――

「……何のつもりですか、峰先輩？」

俺の目は誤魔化せない。

ましてや、それが志乃へと変装した姿なら見抜けない訳にはいかない。
い。

「(丁寧)いつもの改造ゴスロリ制服も着ていない。」

「あちやく。バレちゃった♪」

「早く変装解いてきて下さいよ。志乃の見た目でそんな風にされてると違和感凄いですから」

「えー、もうちよつと楽しみたいのにな」

「俺の反応見て楽しもうとしてるなら尚更です。はよ着替えてきて下さい」

「ぶー！ りつきんのケチ！」

「はいはい、ケチケチ」

持つてきて貰ったスポーツドリンクをコチラに渡し、中へと戻る先輩を見送る。

乾いた喉を潤すため、遠慮なくひと口飲んでから階段へと腰を下ろした。

座りながら手足や体幹のストレッチをしつつ待っていると、数分して戻ってきた。

「おっ待たせー！ 隣いい？」

「どうぞ」

のびのびと使っていたスペースに1人分座れるように空きを作る。

2人並んで座るのは気が引けるので、間を開けた形になった。

「もつと近づいてもいいんだぞっ？」

「嫌です。遠慮します」

「じゃあ、りこりんから近づいちゃおうかなー？」

「いいからとつとと本題に入ってくださいよ」

「……つれないなー」

ボソツと愚痴を吐く。

すると、浮いた雰囲気が一ピシりと締まり、峰先輩の顔つきも変わった。

「——律紀。お前はあたしの敵か？」

針のように細く、鋭い殺気。

彼女が普段演じているおバカキャラ、峰 理子は消え素の彼女が出ている。

「答えろよ。黙秘は肯定とみなす」

突き付けられるまなざしとワルサーP99。

引き金に添えられた指が躊躇いの無さを表していた。

「同郷相手によくそんな目向けられますね」

「同郷だからこそ、お前だからこそだ。隙を見せたら何をするかわからないからな」

「……はあ」

まず思い浮かんだことは面倒くさい。この一言につきる。

俺は向けられた銃に手を置き、ゆつくりと下に降ろさせた。

「先輩の敵になったつもりはないです。むしろ、そっちは順調に進んでもらわないと俺が困ります。手伝いはしませんけど」

「……色々と聞きたいことはあるが、答えるつもりも教える気もないのか」

「そっちだつて同じじゃないですか」

「ふざけるな。同じなわけがない。どうせ、あたしのやろうとしていることを全部把握しているだろう」

(うつわ、怖い)

言葉の通り、俺は峰 理子という人物がこの世界でどのような行動を取るかは知っている。

現在進行形の武偵殺し、無限罪、紫電の魔女……。

挙げられることは多々あるが、教えるわけにはいかない。

未来が少しでも変わればあの人からの依頼は達成できなくなる。

「知ってたとしても邪魔はしません。なんなら、協力できる時は協力します」

「……本当か？」

「ええ。間宮達を鍛えて貰ってるお礼みたいなもんです」

「オルメスと遠山先輩の誘導ぐらいなら手伝いますよ」

「ッ！ くっ!？」

瞬間、構え、発砲すんでのところで銃を奪う。

形勢逆転……とはいかなかった。

「やっぱりもう一丁持ってたか」

「お前……!」

互いにワルサーP99を向け合う。

どちらかが1つ、引き金を引くだけで血の花が咲くだろう。

しかし――

「お前はあたしを殺せない。だろ?」

確信めいた一言。

「死ぬのはお前だぞ。藤 律紀」

「だったら撃てよ。峰・理子・リュパン四世」

『……………』

互いに無言で相手の出方を量る。

張り詰めた糸を先に断つたのは彼女の方からだった。

「…………やめだ」

銃を下ろし、自らの懐へと仕舞う。

「お前を殺したら後が怖い。ひとまずは、お前の上辺を信用する」

「そいつはどうも」

コチラも構えを崩し、グリップ側を相手に向ける。

そのまま受け取る……かと思いきや手が寸前で止まった。

「…………?」

「ねえ、りつきん」

(あ、嫌な予感する)

呼び方が軽い調子に早変わりし、面倒な予感が。

「ここに、い・れ・て?♡」

自ら胸元を開け谷間を晒す。

低身長でありながらも、女という主張をハッキリと示す胸。

ブラが微かに顔を出し、艶のある豊満な肌色が誘惑を振りまく。

……ようは、谷間にワルサーを仕舞って欲しいのだろう。

「アホですか」

「あ痛っ！」

コツンと、グリップ部分で頭を上から小突いた。

「そうゆうのは俺じゃなくて、遠山先輩にしてください」

「……ほんとうつれない」

渋々と受け取り谷間へと収めると、大袈裟に悲しげな表情をし頭を手で撫でる。

「女の子に暴力はいけないんだぞっ！」

「うぜー」

「ハッキリ言いすぎだよ!?」

この人のことを好きか嫌いかで問われたら、俺は迷わず普通と答える。

どつちつかずで絡み方次第で簡単に引っくり返る関係性といったところだろうか。

「すいません。俺は黒髪のと風美人が好きなんで」

「何勝手にフってんだてめえ!?」

「裏出ちやってますよ」

とはいえ、異性への好みには当てはまらない。

「こうなったら、みんなの特訓に付き合ってもらおうからね！」

「それくらいなら構いませんよ」

「ただし！ 内容は4対1の模擬戦ね！」

「……マジですか」

「マジマジ〜♪」

立ち上がり、鼻歌を口ずさみながら中へ戻る先輩の跡を追う。

「機嫌な彼女とは裏腹に俺の気分は沈みがちになってきていた。

「……そう言えばさあ？」

「はい？」

「いくらいつきんとはいえ、何で志乃っぢじゃないってすぐにわかったの？」

「胸のサイズと形が少し違ってたからです」

「……えっち」

「男はみんなえっちですよ」

笑顔の明るさが違った。
そう答えるのは恥ずかしくてやめた。

第17話 束の間の

「コホン。では、間宮班の勝利に乾杯！」

『カンパ—イ!』

時は過ぎ、カルテットは何事もなく終了した。

特訓の成果が表れたのか、間宮班は高千穂班を負かした。

え、肝心の内容？

……説明がメンドイからパスで。

「みんなおつめでとー！」

いつものメンツに加えて、神崎先輩と峰先輩の上級生2人。それと、間宮の妹。

テーブルには大人数で摘まめる料理が並んでいた。

「ん、ピザ美味しい」

「これも美味しいですよ。お皿に取りましようか？」

「ありがと」

志乃と俺は隣り合っている。

俺から見て左側の神崎先輩はもまんを幸せそうに食していた。

「相変わらずのももまん好きですね」

「……ゴクン。あんたも食べる？」

「いや、俺は——」

「理子もーらいつ！」

「あつ!!」

差し出されたもまんが、唐突に間に割り込んできた峰先輩の口
に。

「ん〜♪ 美味〜♪」

「理子! あんた勝手に……って、また!」

「よいではないかく♪ よいではないかく♪」

「……悪い志乃。少し詰めるな」

「ふえ!! あ……ハイ……」

横で始まったわちゃわちゃに巻き込まれないよう、志乃との距離を

詰めた。

肩同士がくっつく。

コーラで喉を潤しながら志乃をチラ見すると、少し顔が赤くなっているた。

「ライカお姉様、あーんですの!」

「だああ! 恥ずかしいからやめろって!」

向かい側の火野と島はいつも通りだ。

「高千穂の間抜けな顔は面白かったな。間宮達のおかげでいいものが見れた」

「でもお姉ちゃん、実践だったら死んでたみたいな勝ち方って聞いたよ?」

「結果としては良かったけど、死んでもいい実践なんかないんだからね。そこはよく覚えておきなさい」

「はい……」

自分でもわかっているのか、しよぼくれる間宮。

神崎先輩の言うことは俺も良くわかるが、ここはフォローを入れておくことにした。

「まあまあ、間宮自身も良くわかってますよ。せっかく勝ったんですから、戦姉妹らしく褒めたらどうですか?」

「んぐつ……!」

嫌な部分を突かれたような声を上げ、咳ばらいを1つ。

「コホン。でも、勝ちも勝ち。よくやったわ」

「っ! はい!」

さっきまでのしよぼくれは何処へやら、一気に明るい表情に変わり元気な返事。

釣られて、周りの何人かも笑みを浮かべてしまう。

ムードメーカーな持ち味も間宮の長所かもしれない。

流星は天然女人望^{アイドル}。

「あれ、ののか? どこ行くの?」

「ちよっとお手洗いに行くだけだよ」

「……」

ののかちやんが席を外したのを横目で確認する。

一見して、平静を装ってはいるが……。

(やっぱり、か)

「悪い、俺もトイレ」

一言残して俺も席を外す。

彼女が向かったであろう手洗いの場所に偶々出くわしたかのように見計らう。

「あ、律紀さん」

「やあ」

トイレから出てきたののかちやんと鉢合わせした。

警戒の色はないようだ。

「律紀さんもお手洗いですか?」

「うん。用があるのはこの先の男子トイレだけど」

——が、よく見えてはいないのだろう。

普通を演じすぎている。

「どこか具合が悪かったりする?」

「えっ。そ、そんなことないですよ」

「……そっか」

2年前に彼女が打たれた毒、符丁毒は確実に身体を蝕んでいる。

残念ながら、俺は解毒方法は知らない。

N—Pは俺の身体から一度出てしまえば劇物と化すため役には立たない。

「ごめん。俺の勘違いだった」

「い、いえ。それじゃあ、私は戻りますね」

俯き気味に横を通ってゆく。

小さな背中が背負うには不釣り合いな大きな不安の影が見えた。

「あのドS師匠……!」

毒を治すには打った張本人から解毒方法を聞き出すしかない。

原作通り、彼女……師匠を逮捕するしかない。

(……トイレ行って戻る)

いつまでもいないままだと変だし、今は祝勝会なんだ。

打つ手がないなら仕方がない。

(その時が来たらどうするか何て、決まってるけどな)

その後、各々が飲んで食べて満足して宴は幕を閉じた。



「んっ。ふああ……」

迎えた休日。

特に用事は無いため、男子寮の自室で課題をしたり、PCで情報を集めたりと気ままに過ごしていた。

「いてて……」

背伸びをすると、凝り固まっていた身体の部分からパキパキと音が鳴る。

課題も終わり、一休みでもしようとPCを閉じた。

昼寝をして英気を養おうとも考えたが勿体ないと思った。

(コーヒーでも入れるか)

日頃から誰かと一緒にいることが多いから、1人の時間もあると息抜きができる。

1人が好きとか誰かと集まるのが好きとか、そうゆうわけではない。

面倒じゃなければそれで良い。

楽しければそれで良い。

前の人生よりも、面白ければそれで良い。

ただ、それだけの話だ。

(といっても、ホントに曖昧すぎてなあ……)

1度死んで神様に会ったわけでもない。

いや、もしかしたら会っているかもしれないが。前世を含めて記憶そのものが抜けており、今となっては今世に関する事柄の方が深く根付いている。

推測通り、転生ではなく生まれ変わりが妥当な気がする。

(考えてもわかんないし、今はいいか)

淹れたコーヒーに口を付け、別の事に思考を切り替えようとしたところで、呼び鈴が鳴った。

(……志乃か?)

玄関に向かい、ドアアイ(のぞき穴)から覗き込む。

扉の前に立っていたのは予想通り志乃だった。

「こんにちは、りつくん。急にお邪魔してすみません」

「寛いでいただけだから大丈夫だよ」

一応、ここは男子寮だから女生徒が出入りするのはいくつかない。

生徒間で見られても噂されたり印象が変わるくらいだが、備えるには越したことはない。

流石に教員に見られたらアウトだが、隠れて互いの部屋で逢引するカップルも少なくないため、一部の教員は軽く注意とか簡単な反省文程度だ。

俺と遠山先輩は特に気をつけないといけない。

「まあ、とりあえず入っ……ん?」

ふと、志乃の後ろで何かが動いた。

よく見ると、彼女の黒髪とは別のモノが少しだけ見てとれる。

「……美咲さん?」

「ッ!?」

呼び掛けに反応し恐る恐る顔を出した人は、戦姉妹の美咲さん。

「こ、ここ、こんにちは」

「ど、どうも。……え? 何で2人が一緒に?」

初めての光景に固まる。

疑問が頭の中から溢れそうになったのを、口が勝手に繋いでいた。

「その、私が誘ったんですけど……」

「あ、あ……」

そういうことか。

くるべくしてきてしまったのか。

「ど、とにかく2人も入って」

「は、はい。お邪魔します」

「お、お邪魔します……」



居間へと案内し、冷蔵庫から麦茶を取りだす。
グラスへ注ぐ最中、腰掛ける2人の様子を伺う。

志乃はいつも通り。

しかし、あくまでも表面上は。

美咲さんは緊張しているのかカチコチだ。

男子寮に入るのも、男の部屋に来るのも初めてなのだろう。

喉を潤すには充分な量のお茶を運び置いて、俺自身も席に着いた。

「それで、2人揃って何をしに？」

問いへの答えは少し間が空いてから帰ってきた。

「えっと、中空知さんも混じえて、3人の今後のお話をしたくって

……」

案の定、決めなければならぬ時がやってきた。

「この前、5人までなら許しますって言ったこと覚えてますか？」

「覚えてる。けど、アレってその場のノリとかじゃ——」

「違います。あの言葉は私の気持ちです」

「……ごめん。俺の受け取り方が間違ってた」

女心とは難しい。

「だからといって、ホントに5人も実現されちゃうと複雑ですけどね」

あはは、と何とも言えない笑みを志乃は浮かべた。

「そこは、その、気をつけるよ」

「……そうしてくれると、嬉しいです」

彼女達に甘えすぎるのは良くない。

男としても、人間としても。

責任を持つべきなのは俺だから。

「中空知さんには既にお話ししてあります。私達の思いは変わっていません。何があってもりっくんと一緒にいたいです」

「……良いんですか、美咲さん」

「は、反対ならここにいないよ？」

「それは……そうでしょうけど」

「やや、やっぱり迷惑？」

「そんなわけない」

「なら、悩むことはないじゃないですか」

「律紀君も、素直に言ってくれて、いいんだよ？」

「こんな、こんな都合の良いことがあって良いのだろうか。」

思考が揺れている。

「ああ、くそっ」

情けない男だ、俺は。

踏ん切りがつかない姿は彼女達の目にどう映っているのか。

「話せない秘密がある」

「わかってます」

「どうしようもない男だ」

「そ、そこが、好き」

「何考えているかわからないだろ」

「でも、私達のことを気にかけてくれます」

「上辺だけかもしれない」

「だ、だとしてもっ」

美咲さんが近寄り、抱きしめてきた。

回された腕の力は、普段の彼女にはとても似つかないくらい強い。

「私はもう、律紀君以外は考えられないよ……！」

「私です。りっくん」

反対側から、志乃が同じように身体を抱きしめる。

「また、りっくんがいなくなったら怖いです……！」

ほんの少しのやり取りで、彼女達から俺にはない強さがあるのを

悟った。

どれだけ言葉を並べても彼女達は引かない。引くことができない。

そうしてしまった彼女達を愛すべきだ。

ウジウジするな、馬鹿野郎。

「……幸せに、する」

左右それぞれの腕で2人を引き寄せた。

「絶対に」

「っ！うん！」

「は、はいいい！」

気合を入れ直さないといけない。

守らないといけない大切な人達ができたから。

元々、何があるうとそのつもりではいたが。

「り、りっくん。それで、ですね……」

「ん？」

左手側、抱きついたままの志乃がモジモジと語り出す。

「カルテットを頑張ったご褒美とか、欲しい……なんて」

「わ、私もっ。最近あ、あんまり会えなかったから……」

右手側の美咲さんも、ソレに乗じて甘えだす。

2人揃って柔らかな肢体を惜しげもなく押し当てアピールしてきた。

心境が一気に切り替わる。

2人の美少女を堪能できる立場を段々と認識する。

「明日学校あるけど」

「はあ♡んっ♡」

志乃の耳を擦り、うなじへと軽い指先を踊らせる。

「始めたら、多分止まらないけど」

「っ♡あん♡」

美咲さんの背中をゆっくりと撫でる。

「ベッド行くぞ」

『っ♡』

雄の宣言に雌は震え、3人で寝室へと移った。

第18話 満たす愛と溺れる愛 ☆

シンと静まるリビングとは対照的に、ベッドルームは苛烈なまぐわいを繰り広げる。

真つ白なシーツを敷いたベッドに仰向けになった俺。

「ちゅ♡んちゅっ♡……はぁ♡りっくん♡んんっ♡」

キスを絡めながら身体を密着し、俺の手を自らの乳房へと触れさせる志乃。

「んっ♡あっ♡おくにっ♡ズンズン、きてっ♡」

そして、股を開いて騎乗位で腰を動かす美咲先輩の姿。

俺は今、男として最低であり最高なひと時を味わっていた。

「志乃……」

「んむっ♡はあっ♡あんっ♡」

掌を優しく押し返す乳房の弾力。

それ以外にも、お腹や太ももといった部位を絡めながら興奮を逆立ててゆく。

「あっ♡あ、んっ♡ちくびっ♡こりこり、っ♡」

揉みながら硬い突起を転がし、時折摘んで刺激を与える。

「あ、ああっ♡ひうっ♡り、りっくん♡キス、してえ♡」

「……っ」

「ちゅっ♡んっ、みゅ♡ちゅぴ♡はっ♡へろ♡ちゅ♡ちゅ、れっ♡」

口内で交わる舌と唾液の水音が響く。

小さな息継ぎを挟みながら、キスを施し合う。

「あっ♡おちん、ちんっ♡膨らんでえ♡」

懸命に腰を振る美咲さんの中で、分身が徐々に肥大してゆく。

「律紀くんっ♡あぐう♡っ、んう♡」

射精の欲求も増し腰が浮き、下から突き上げる手助けをする。

「んっ♡んっ♡ん、っ♡ふかっ♡い、いっ♡っあっ♡っ♡」

まさに天国。

「んちゅ♡ふっ♡はあ、んっ♡ちゅぶ♡」

「あっ♡あ、あっ♡んぐ、ひうっ♡」

自分の感覚がおぼろげになってしまいそうな快樂。
溺れそうな程、濃密なまぐわい。

「……っ♡ふ、は、はあ♡段々ビクビクしてきましたね♡」

「ハアッ！ハアッ！——んっ」

「んあ♡」

少し顔を動かして、志乃の鎖骨へと口付けを落とす。

薄く桃付いた肌はしっとりとし、唇を通してその瑞々しさを感じる。

数秒して、志乃の両手が顔に添えられた。

「ふっ♡っ、ふっ♡……ここも、キスして？」

目の前に寄せられた胸の先っぽを躊躇なく啜えた。

「あゝっ♡あん♡い、いっぱい♡ちゅうちゅうしてえ♡」

口内で舌を使い乳首をねぶり、しゃぶる。

顔全体に押し付けられる胸の柔らかさも相まって、興奮は加速してゆく。

「んっ♡いい、よっ♡なかにっ♡ハッ♡いつでも、出して、いいからっ♡」

ズンズンと最奥を小突く肉棒は限界が近くなる。

見えなくても、滲む先走りには白濁が混じり始めたに違いない。

「ちんちんっ♡白いのっ♡ぜんぶ、きてっ♡」

「おっぱい、んっ♡吸いながら♡射精、しちゃいましょう♡」

腰が、強くビクつく。

「アッ♡」

「~~~~~っ♡♡う、うっ♡♡♡」

根本まで逸物を入れ射精を受けながら、美咲さんは達してゆく。

「い、クッ♡ハッ、あっ♡~~~~~っ♡♡♡」

流れゆく精液はあっという間に彼女の子宮を満たし、結合部から漏れ出す。

それを感じたのか、溢れないようにと膣内が締めりだした。

「んゝゝゝゝ♡んーっ♡」

「っ！っ！」

「ハッ、んっ♡」

濁った水音をたて、逸物が引き抜かれた。

「んむっ、はあ……」

「……いっぱい、出ましたね♡」

ようやく息をつき、体を少し起こしながら美咲さんを見やると、女の子座りのまま膝を震わしている。

「だ、大丈夫ですか？」

「う、うん♡平気、だよ♡……えへへ♡」

嬉しそうに浮かべる笑顔の破壊力たるや、凄まじいものがある。

固く振り返ったままのチンコが反射的にピクリと跳ねた。

「っ♡っ、次は志乃ちゃんの番だから……」

そつと優しく後ろを振り向かせられる。

「……りっくん♡」

お尻をこちらに向け、秘部から垂れる蜜を曝け出し、志乃が今か今かと待ち構えていた。

「……きて♡」

その誘いに抗うことなど当然できない。

近づき、向けられたお尻を鷲掴みにして、少し開く。

「んっ♡」

熱を持った互いの性器が触れ合い、義務感に駆られるように腰を押し進めた。

「ふーっ♡ふーっ♡……んあ♡」

トン、と最奥を揺らせば志乃が大きく悶える。

膣内の肉ヒダも次々に絡みつき、子種を搾ろうと蠢く。

「んっ♡んっ♡んっ♡っは、ああ♡」

リズムよく腰を打ち付けてゆくと、志乃の上半体が項垂れてゆき、胸がシートへと卑猥に潰れる。

力が入れにくいにも関わらず、腰だけは此方に合わせるように上げたまま、男根を嬉しそうに受け入れていた。

「つい、てえ♡もつと♡んく、までっ♡」

「志乃……！」

「りっくんのっ♡いっぱい、欲しっ♡イツ♡」

甘イキをしたのか、中が微かにキュツと締まる。

「うっ♡おちんちんっ♡もつと、ついてっ♡ずぼずぼっ♡してっ♡」

「……律紀君♡」

身体に押し付けられた柔らかく、甘い誘い。

チンコの出し入れに夢中になる中、美咲さんからのおねだりが。

「ん、ん……♡」

身体の左側へとくっ付いたまま目を瞑り、唇を突き出し姿勢。

「っ♡ちゅっ♡ふゆ、ふっ♡れろ♡んれ、っ♡ちゅむ♡」

すぐさま応え、舌と唾液を交換し合う。

志乃のお尻に添えていた両手……左手だけを離し、美咲さんの身体の上に滑りこませる。

「んんっ♡ん、やあ♡おっぱい、あっ♡んっ♡ちう♡」

汗ばみ、シットリとした感触。

どこまでも指が埋もれてしまいそうな柔らかく、大きな未だ成長中の巨乳。

「ちゅっ、れう♡ちゅ♡ぱっ♡んっ♡」

起立した乳頭を指先で摘み、乳房全体を揉むのと同時に転がしてゆく。

「んっ♡」

「はあ、柔らかか。ん……」

「んう♡フ、んんっ♡」

ひとしきり胸を楽しんだ後は、ムツチリしたお尻へと左手を回す。

勿論、互いに密着したままキスは続ける。

「あっ♡りっくん、のっ♡きもちいい♡ふあ♡きもちいいよ♡」

「あうう♡お尻、そんなに揉んじやっ♡」

満たそうと尽くしているのに、彼女達に溺れそうになる。

「ッ、あぐっ♡もう……♡」

志乃の肢体と膣内が震え始めた。

「い、いっしょに♡イキ、たいっ♡りっ……くん♡」

「あ、ああ……！」

「せいしっ、なかにっ♡たくさんっ♡」

オーガズムが背筋を駆け上がってくる。

すぐそこに迫る射精の存在を感じた。

「んっ……♡あっ♡」

横にいた美咲さんが後ろに回り、こちらへ腕を回し、身体をまたくっ付けてきた。

「っ♡しょ♡う、うう……♡」

巨乳が潰れ、広がる。

背中越しにコリコリと擦れる先っぽがある。

情欲を煽るように胸を押し当て、ピストンの反動を殺してくれるようなクツションみたいだ。

「こ、これ♡どう、かな♡」

「最高、です……！」

呻く志乃のウエストをガツチリと掴み、達するまでの秒読みが始まった。

「あ、っ♡ひっ♡はあ♡はあっ♡ん、ううっ♡」

「かっ、づう……！」

「いっぱい、擦れてっ♡ああ♡あんっ♡おくに、凄いい♡」

「ハアッ！ ハアッ！ 志乃……！」

「イクウ♡イクっ♡っ、ふえああ♡」

心臓の鼓動が早まりやがては聞こえなく、耳に入らなくなってくる。

その瞬間はいつもと同じく、こちらの予想を超えた快感を齎した。

「——ヴッ！」

頭が真っ白になる。

「っ♡♡♡」

何も考えられなくなる空白の時。

しかし、本能で自然と腰は突き出しながら、遺伝子を雌へと送り込む。

「へ？」

「わ、私達が元気に、するね♡」



「う、おお……」

「んっ♡美咲さんのやっぱり大きいですね……」

「し、志乃ちゃんも大きいよ……？っ♡」

2人の巨乳が、乳房が、たぶたぶと左右から逸物を挟む。

視覚的にも感覚的にも最高のダブルパイズリ。

志乃の言葉に従った矢先、名目上の休憩が始まった。

「んっ♡んっ♡」

「はっ、あっ♡」

腰と性器の震えが早々にきて、止まらなくなる。

「おつゆ、とろとろ出てきましたね♡」

「も、もうカチカチだよ♡」

「こんなんされたら、勃つに決まって……！」

根本から亀頭の天辺まで包み込んだまま圧迫し、上下に揺らされる。

「あん♡暴れたらダメです♡」

息子が柔肉を掻き分けるように蠢くと、逃さぬように志乃が優しく抑えつける。

「あっ♡先っぽにキス♡ツ♡」

卑猥に歪みもつれあいながら、時折どちらかの乳首に亀頭が擦れる。

「きもちっ♡よさそうで、よかったです♡」

「お、おちんちん♡凄いつ♡熱いよお♡」

「先っぽの割れ目、パクパクしてます♡可愛い♡」

「おっ、おっばいに出して、いいからね♡……びゅー♡」

「っ、はあ……！」

汗で蒸れた谷間に、何度も何度も往復される。

初めてのダブルパイズリの感覚は、言葉では表せないくらいの快楽を起こし、トリップさせる。

「たふたぶ♡ふわふわ♡」

「びゅー……♡びゅー……♡」

「りっくんの大好きなおっぱい♡いつでも出しているですよ♡」

「お、おちんちん♡びゅー……♡ちんちん♡びゅー……♡」

もはや呻くことが困難になるほど、彼女達の愛に俺は取り込まれた

「りっくん♡」

「律紀君♡」

『射精して♡♡♡』

「グウ、オッ！」

胸の間に姿を隠したチンコが一際強く震えた。

「あっ♡」

「んんっ♡」

2人の潰れあつた谷間からびゆるりと小さな白い噴水が1つ立ち、

彼女達の肌を染めた。

「はあ……♡いっぱいあい♡」

「と、止まらない……♡」

そこからはジワジワと広がるようにザーメンが吐かれ、乳肉の上に精液溜まりを作りながら、雄臭い性臭を放つ。

「気持ち、よすぎだ……！」

「抜き、ますね♡」

「ん、んーっ♡」

「ッ！」

打ち止めを感じとり、2人は改めて乳圧を強めた。

そのままゆっくりと上に乳房を移動させ——

『っ♡♡♡』

にゅとん、と間抜けな音と共にやつと男根が解放された。

「はあー……！ はあー……！」

「ああ……♡おっぱい、ぐちやぐちやです♡」

「ふっ♡こ、これっ♡に、匂い染みついちやう……♡」

(きゅ、休憩つて、何だったっけ……?)

未だ混乱中なのを認識すらできず荒く息づきながら、俺の視線はは2人の汚された豊満な果実から引き剥がせないでいた。

精液で一層とヌルヌルになった乳房が揺れた。

「……りつくん♡」

ぴとり、と天を向くチンコへ志乃が片乳肉を当てる。

「……律紀君♡」

反対側から、美咲さんが同じように胸を当てた。

「次は、どうしましょう?♡」

「また、おっぱいでぴゅー……する?♡」

そこに雄が抗う術など一つもない。



レインボーブリッジの灯りが暗闇にハッキリと映える時刻。

人目に付かない外れで…武偵殺し…である峰 理子——峰・理子・リュパン四世は、揺れる海面へ目と手にしたライトを向け明滅を繰り返す。

数分して、二隻の潜水ポッドが水面から顔を出した。

「おっ、きたきた〜!」

鼻歌を奏でながら出迎えると同時、ポッドの操縦席が開かれた。

「ジャンヌ♪ 夾竹桃♪ おっ疲れちゃーん!」

「疲れてはいない。自動操縦だったからな」

一隻から現れたのは銀髪とサファイア色の瞳、加えて剣を携えた少女。

彼女の名はジャンヌ・ダルク30世。理子と同じ組織、イ・ウーの構成員の1人である。

理子から差し出された手をジャンヌは掴み、陸へと上がった。

「夾きよちゃんはどうか?」

「平気よ。眠っていただけだから」

もう一隻で煙管きせるを吹かしながら姿を現した少女は、黒いセーラー服に身を包み、切り揃えられた長い黒髪を携えた姿。

理子とジャンヌ同様、彼女もイ・ウーの構成員の1人。名は、夾竹桃。

「お手をどうぞ」

そう言いながら、理子は夾竹桃にも手を差し出す。

が――

「……つと、夾ちゃんにはやめとくか」

「賢明よ」

差し出した手が彼女の左手ひだりてを受ける形になるのに気づき、理子は手を引っ込めた。

夾竹桃はやれやれといった形で腰を上げ、大きなトランクと共に上陸した。

「それじゃあ、役者は揃ったということだ！ 各ターゲットGガールの拉致トラップまた殺害、GGG作戦楽しもー！」

「気を付けろ。お前のターゲット、アリアはSランク武偵だぞ」

イ・ウー内で比較的仲の良い同期3人。

それぞれが己の目的を持ち、企む。

「アリアなんかちよろいちよろい♪ もう準備万端♪」

「では、私の準備を手伝え。星伽 白雪を帰郷次第獲る。お前は誰を獲る予定だったか」

ジャンヌの問われ、夾竹桃は啞えた煙管を離して答える。

「2年前に植えた種がそろそろ花開くの。それを摘みに来ただけ」

フウー、と唇から細い煙を吐き出した。

「それくらい簡単な仕事。私のターゲットは間宮 あかり。後は――

――理子？」

「っ!!」

「本当に、アイツがここにいるのよね？」

いつも悠々としたマイペースな夾竹桃とは違った雰囲気。

気づいた時に喰われてしまいそうな不気味な圧に、理子とジャンヌは息を呑む。

「も、勿論！ りこりん嘘ついてないよ！」

「……なら、いいわ」

夾竹桃が、ニヤリと微笑む。

「勝手にいなくなったバカ弟子にはお仕置きしないと、ね……。フフ
フ……」

「……ね、ねえ、ジャンヌ？」

「何だ」

「何だか、夾ちゃんすっごい怖いんだけど」

「……アイツがいなくなってからこんな調子なのはお前も知ってただ
ろう？」

「そうだけど……」

「何をコソコソ話してるのよ。行くわよ」

「え、あつ、ちよつ、夾ちゃん待ってー！」

「……はあ。やれやれ」

律紀にとつて、避けられぬ厄介事が背後に迫る。

本来存在しない筈の彼は、これからどうするのか。

何にせよ、彼の嫌いな面倒事なのは変わらない。